

## 第4章 測量調査による遺構の分布と構造

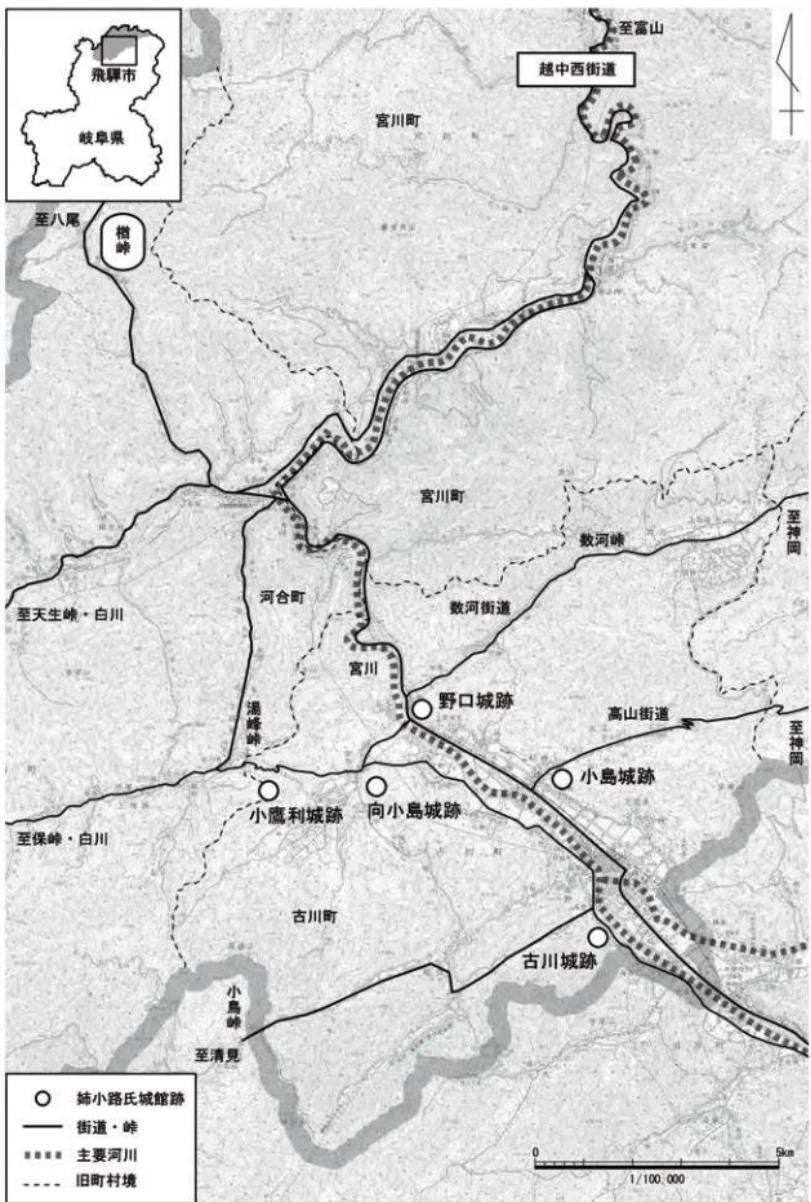
### 第1節 調査の方法と経過

姉小路氏城館跡を構成するのは、古川城跡・小島城跡・野口城跡・小鷹利城跡・向小島城跡である(第15図)。これらは、江戸時代の地誌『飛州志』に絵図が掲載されるなど、古くから曲輪の広がりが示されてきた。また城郭遺構の配置を認識するための遺構配置図も、佐伯哲也らにより示されてきた(古川町 1986b、岐阜県教育委員会 2005、佐伯哲也 2018 など)。これらの遺構配置図は、山城の構造を知る上で基礎となっている。しかし、これまでは詳細な地形測量を行っていないという課題があった。また、市の主体的な踏査による遺構配置図も作成していなかった。

このため、今後の保存活用に必要な城域や遺構分布の把握等の基本図作成を目的として、詳細地形測量図を作成した。また、踏査の際に城郭遺構を確実に把握するため、地形の起伏が高精度に示され、平坦地と斜面地の傾斜変換点が明確である微地形表現図も作成した。それらの図面を基に、調査者の判断により、城郭遺構の認定や構造の理解が示されるのが遺構配置図である。これにより遺跡の範囲を推定することができ、保護する範囲を決定する根拠となる。このたび、飛騨市教育委員会として把握した城郭遺構を遺構配置図として示した。

姉小路氏城館跡を含む古川町周辺については、岐阜県林政部治山課が担当でレーザー測量を実施済であった。このため、岐阜県からデータ貸与を受けて、2018 年度に詳細地形測量図・微地形表現図を作成した。それらを基図として 2019・2020 年度に現地踏査を実施し、各山城の遺構配置図を作成した。

飛騨市教育委員会では、これまでにも韋松城跡などで遺構配置図を作成して手順を示している(大下永 2021c、第16図)。姉小路氏城館跡でもそれに従った。現地踏査に当たっては、詳細地形測量図と微地形表現図を重ね合わせた図を 1000 分の 1 で作成した。微地形表現図に表示される地形の起伏を、人為的な遺構であるか否か、遺構の場合は曲輪・堀切・堅堀など性格について解釈を加えながら図化を進めるためである。微地形表現図で示される傾斜変換点を地表面観察にて視認し、認識した城郭遺構を線引きした。しかし、現地表の起伏が少ないと、曲輪の上端に沿って土壘と考えられる若干の盛り土が認められても、微地形表現図に傾斜変換点が明示されない場合もあった。このような場所でも現地で城郭遺構と判断した地形の起伏は、補足で現地測量を行って図化した。また、これまでの研究によって、古川城跡・小島城跡の 2 城については地表面に部分的に石垣が露出することが示されていた(岐阜県教育委員会 2005、佐伯哲也 2018)。よって、石垣の残存状況と構造を把握するため分布図を作成し、特に残存状況が良い箇所については立面図を作成した。立面図作成について、小島城跡は 2019 年度に三次元レーザー測量及び写真測量により実施し、古川城跡は 2020 年度に写真測量により実施した。全体的な残存状況が不明瞭な箇所が多いため、現状として 2 石以上石材が並んで残存するものを石垣・石垣残欠の可能性のあるものとして立面図作成の対象とした。なお、立面図中の破線は埋没箇所を示している。



第15図 茜小路氏城館跡位置図

遺構種別	説明・判読目安	赤色立体地図	判読例	赤色立体地図をもとに作成した縄張り図
曲輪	山を削平して作られた平坦地。白色が強く見え、赤色の切岸との傾斜変換線によって平坦地の端を判断できる。			
切岸	山の斜面を切って造られた人工的急斜面。曲輪等の城郭遺構の周囲に分布する。縄張り図ではケバで表現する。			
堀切	尾根筋を握り切って切断した空堀。尾根上にI字状やV字状の堀り込みが確認できる。堀底は白色で表示される。			
豎堀	山の斜面に沿って縦に掘られた空堀。赤色の色彩が周囲より線状に濃く表示される。			
横堀	曲輪を周囲に配置された横方向の線的な空堀。赤色の色彩が堀方、白色が堀底と判断できる。			
土壘	土盛りの防御壁。線状に表示され、上面は白色、落ち込みは赤色で確認できる。			
土橋	土で築いた橋。堀切等を渡る施設として土壘状に確認できる。			
戸状空堀群 (戸状豎堀群)	土壘と豎堀を連続で構築する城郭遺構。			

第16図 遺構判読種別図（大下永 2021c より転載）

## 第2節 古川城跡

### 1 遺構の分布と構造

古川城跡は、宮川左岸の丘陵山頂に位置する。尾根に設けられた曲輪や切岸などの城郭遺構と、宮川に面して山麓に広がる平坦地群との2つのまとまりを確認できるため、山城地区と山麓地区に区分して報告する（第17～19図）。

#### (1) 山城地区

最高所に位置し、最も広いのが曲輪1である。曲輪1から派生する尾根沿いに分布する城郭遺構を山城地区とする。曲輪1が主郭であろう。その西端は、全体に1mほどの高まりで三角形状を呈する曲輪2である。櫓台と考えられる。曲輪2の南端が1段下がって曲輪1と接している。曲輪1と2をつなぐルートが他に確認できないため、この部分が通路であった可能性を想定できる。

曲輪1の東側に約6m四方の高まりを観察できる。その西側に人頭大の礫が散乱する。元々礎石建物の礎石であった可能性がある。曲輪1・2は長大な切岸で囲まれる。曲輪1の南東隅から東側尾根をくだることができる。通路入り口にも人頭大の礫が2石並んでいる。この2石は、石の面が通路と平行しており、人工的に据えられたものと考えられる。この2石により曲輪に対して南側から入るよう規定される。この入り方は後述する虎口7と同様である。このため、人頭大の礫2石は虎口石垣と推測される。

東側尾根は小曲輪を一つ経て帯曲輪3とつながる。帯曲輪3は多少の段差を有しつつ、曲輪1・2を全周する。この帯曲輪3の北東あたりには、1m以上の転石が散在する。その上辺の曲輪2の北西側切岸の下半部には、露頭が位置する。曲輪2北側の切岸にも石材が数点認められるため、これが石垣の残りなのか露頭なのかは判断が付かなかったが、1m以上の転石はそのいずれかが崩れて帯曲輪3に落ちたものと考えられた。また、曲輪2の西側直下の帯曲輪3でも1m程度の石が散乱している。さらに、この2ヶ所の帯曲輪3の切岸上端に揃えて人頭大の石が並び、石垣の様相を呈する。この帯曲輪3からは、東側・西側・南側に尾根が続き、遺構が配置されている。

東側の尾根には、切岸から2mほどの段差を経て曲輪4と接続する。この段差には1m以上の石が散在し、石垣があったものと推測される。また、曲輪4の南側切岸にも人頭大の石が散在する。曲輪4の上端南辺は西側が張り出し、虎口7を監視する構造となっている。曲輪4の東側は直線的に30cmほどの下がる段差があり、曲輪5が配置される。曲輪5には場所によっては2m以上の切岸を介し、帯曲輪6が巡る。この切岸にも石が散在し、一部は積まれているため、石垣があったものと推測される。この石垣は曲輪5の南西隅の下が最も低く、直角に折れる。この部分が帯曲輪6から曲輪5へと登る虎口7であり、枠形虎口と想定される。帯曲輪6は東隅で切岸がゆるやかになっており、下段の帯曲輪8と通じる。帯曲輪8からは北側と南側に尾根が取り付く。

帯曲輪8の北側尾根には堀切を挟み、4つの小曲輪が連続する。堀切の西側から各小曲輪の西側を通る通路設定がなされている。そこからさらに東西に尾根が派生し、西側には土塁を伴う曲輪が1つ、東側にはやや広めの曲輪9が位置する。曲輪9からはさらに北と東に尾根が分かれる。東側尾根は曲輪9の前面に配置する長大な切岸10により遮断され、切岸10に伴う帯曲輪の両端を堅堀で落とす。北側の尾根は4つの小曲輪と堅堀を配置する。

帶曲輪8の東側尾根は、2つの小曲輪が離れて位置した後、曲輪11が配置される。その北東隅から下段の曲輪12につながる。曲輪12には前面及び周囲に2段の帯曲輪が巡る。この帯曲輪の南側の一部は後世の削平により滅失している。

帶曲輪3の南側尾根は、その上端から山麓まで続く堅堀13があり、その東側に曲輪14まで続く土壘状の通路がある。曲輪14は南西側の上端が斜面地となる。

帶曲輪3は西側尾根に向かって張り出す。その直下に長大な切岸と1m以上の礫が散乱する曲輪15がある。曲輪15の北側に2本の堅堀を配置する。その西側には両堅堀か自然地形の谷か判断が難しい落ち込みがあり、城域を区切る。

#### (2) 山麓地区

宮川に面する最下段の谷部の日当たりが悪い場所に、一連の平坦地群が位置する。これらの平坦地群は、城郭遺構である切岸10と曲輪12に挟まれるため、古川城跡に関連する遺構と考え、山麓地区とした。

山際で最も奥まった位置にあるのが平坦地16である。中央はさらに一段高い。また南西隅の平坦地17も16と同様一段高い。この裾から湧水があり、最も広い平坦地18を縦断して太い水路に至り、一段下の平坦地20と平坦地21・22の間を通つて宮川に落ちる。水路より南側の平坦地は堆積した土砂により明確な形状は不明である。

平坦地17からはつづら折れで3つの小さい平坦地を経て上方の平坦地23に至る。そこからさらに谷側の上方に3つ、尾根側の上方に4つの平坦地が続く。それぞれの中間を通る通路があり、比較的容易に各平坦地に至る。尾根側の平坦地の上方に曲輪12が位置する。

最も広い平坦地18は北側で細く通路状となり、その上方の平坦地24と一段上の25に至る。平坦地24からはつづら折りで上方の谷に9つの平坦地が連続する。平坦地25は北側が少し下がり、切岸10と接するところで上方に3つの平坦地が続く。切岸10の上端に沿つて通路が設定されている。

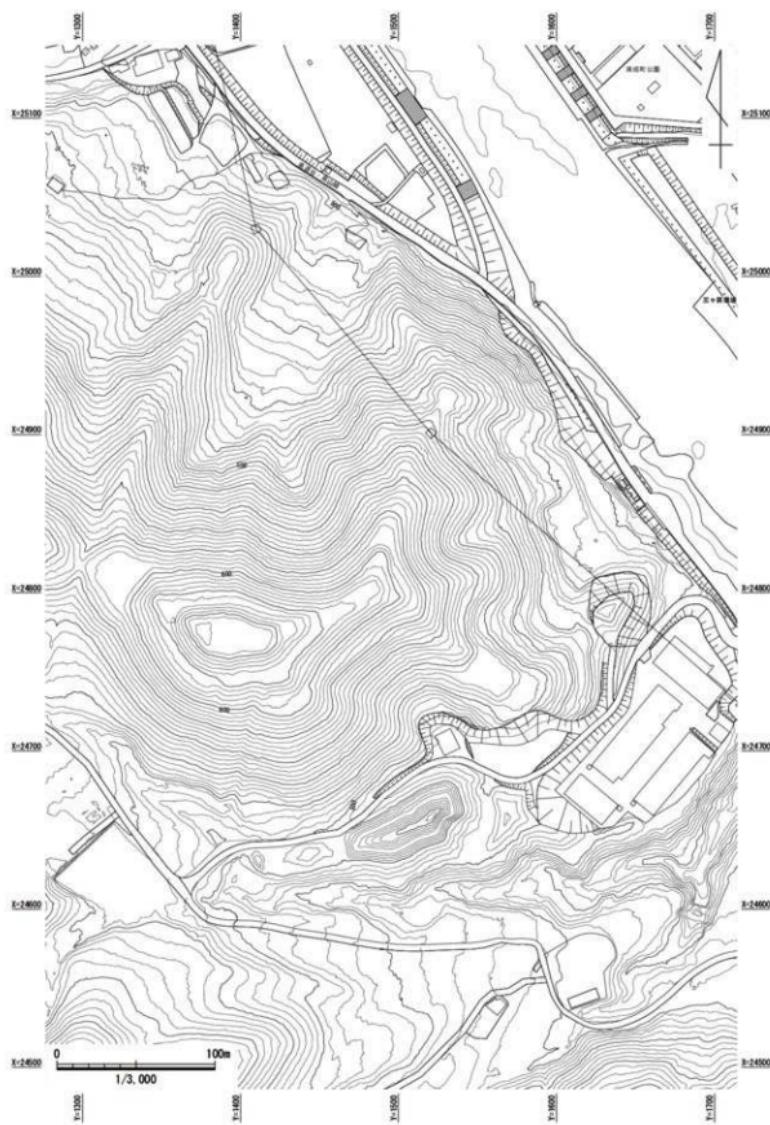
#### (3) その他の遺構

古川城跡の南東側の山麓には現在工場が建っている。その敷地内の南西隅部に土壘と想定される高まり26が認められる。

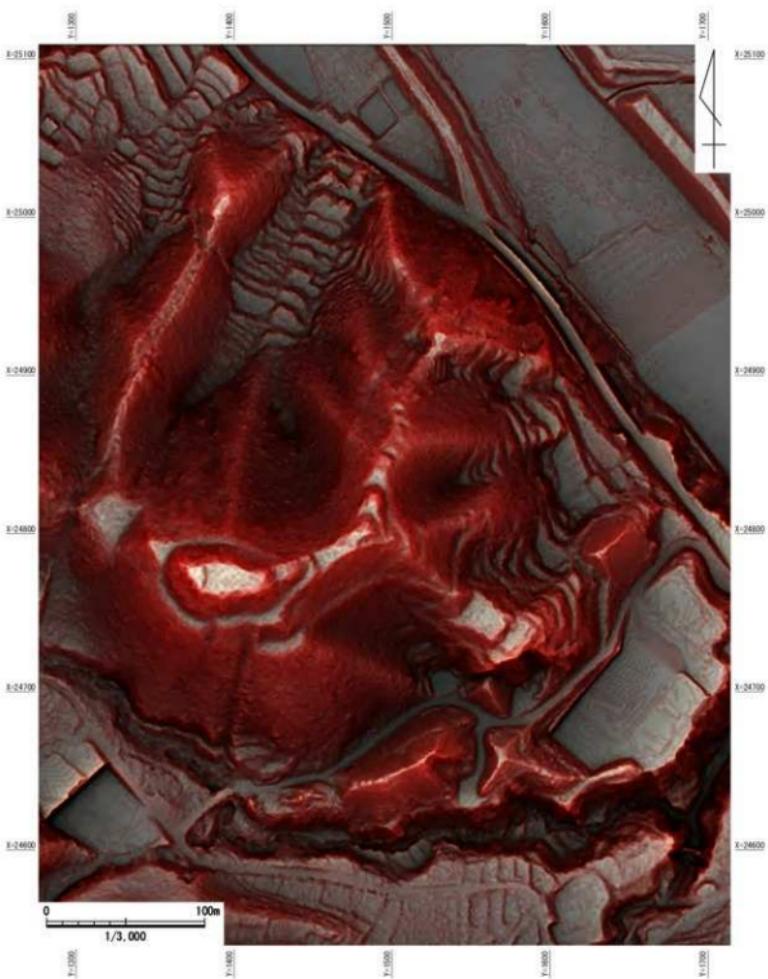
#### (4) 特記事項

古川城跡は、1m以上の石材を用いた石垣で耕形虎口を形成する虎口7、同じく1m以上の石材を用いた石垣が並ぶ曲輪4の西側切岸が象徴的である。また、帶曲輪3の北西側周辺では上端に沿つて石垣が施され、曲輪15にも石が散乱する。さらに、曲輪4・5・6の南側切岸においては、石垣の可能性がある石材が散在する。このように、山城地区でも曲輪8や15より上方の曲輪周辺においてのみ石垣やその可能性がある石材の散在が認められる状況である。一方、曲輪8より下方の北・東側尾根には、堀切・切岸・曲輪といった土造りの城郭遺構が認められる。

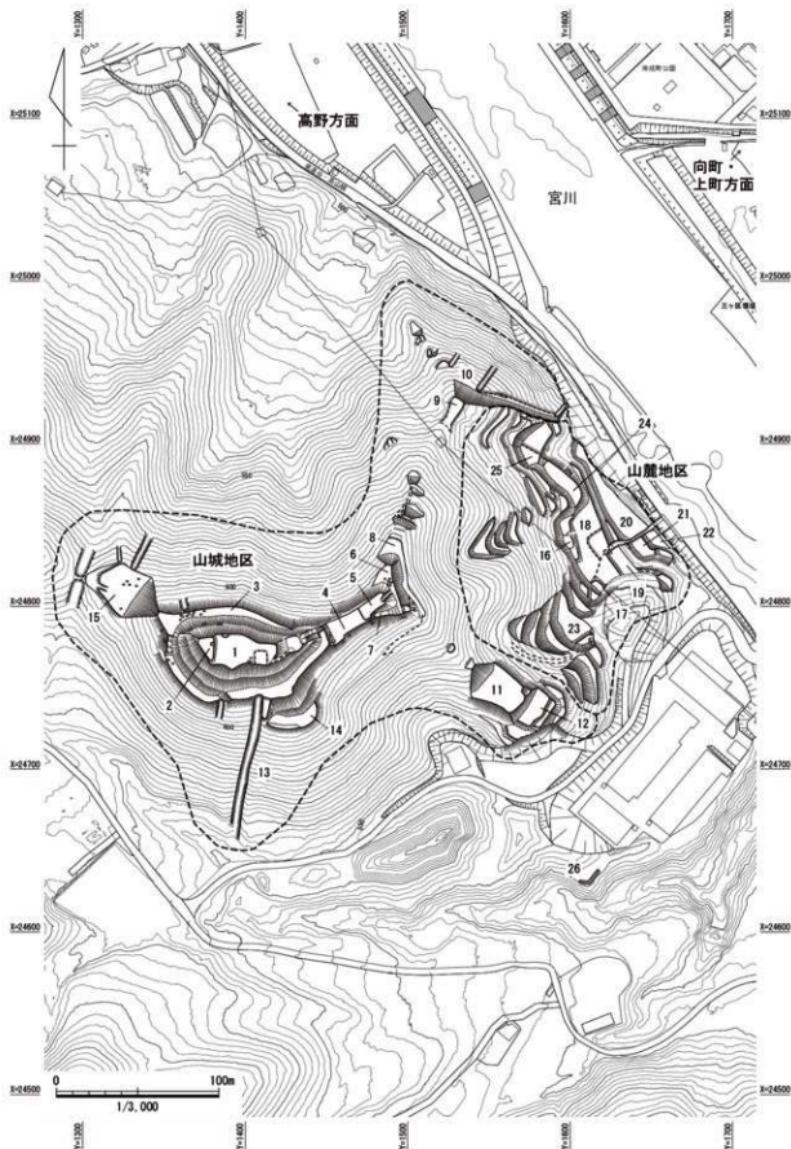
山麓地区は、宮川に面して平坦地を開拓する。湧水があり、谷地形に位置するため日当たりも悪く、湿潤な場所である。どのような性格の遺構群なのか、今後の検討課題である。また、南東部に位置する工場敷地一帯は家臣の屋敷地の伝承があり、土壘26は関連する遺構の可能性がある。



第17図 古川城跡詳細地形測量図



第18図 古川城跡微地形表現図



第19図 古川城跡遺構配置図

以上のように、古川城跡では主郭周辺でのみ石垣が用いられ、主郭から離れた山麓地区などの土造りの城郭遺構の在り方とは異なる状況が明らかとなった。

## 2 石垣の現況

### (1) 分布の状況（第20図）

古川城跡の石垣は山城地区内に分布する。最高所に位置する曲輪1・2、周囲を廻る帶曲輪3の周辺斜面に石材の分布が確認できる。さらに曲輪4・5・6・7周辺の切岸や、曲輪14上部の切岸にも石材の分布が確認できる。帶曲輪3・曲輪6・7・14等の平坦地に分布する石材は転石と想定される。

曲輪1・2周辺について、曲輪2の下部の切岸に石材が分布する。このうち南側斜面は岩盤の露頭と推定されるが、北側斜面は数ヶ所で並列する石が確認できる。その下部に位置する曲輪3にも転落石と推定される石材が多数確認できる。この中には大きいもので1m程度のものがある。さらに、曲輪2の範囲を基準として曲輪3下部の切岸にも石材が分布する。部分的に人頭大の石が並列し、石垣の様相を呈する。ただし、2段以上積んだ状態のものが無いため、構造は推定できない。また、並びが確認できる石材は斜面に埋没しているため、裏込めの有無も確認できない。

曲輪1の東側斜面にも並びは確認できないが人頭大の石材が複数確認できる。この付近は東側尾根の曲群との取り付きや虎口の存在が想定されるため、これらに関連した石垣の存在が想定できる。

曲輪1の東側尾根に位置する曲輪4との間の段差に、石材が複数存在する。一部は1m程度の大きさがあり、面を意識して立てている様相が確認できる。この区画の斜面の端には比較的小さいものではあるが石材が埋没しているため、この面全体に石垣が存在した可能性が想定できるが、それぞれ南北に取り付く斜面の先は石材が連続していない。

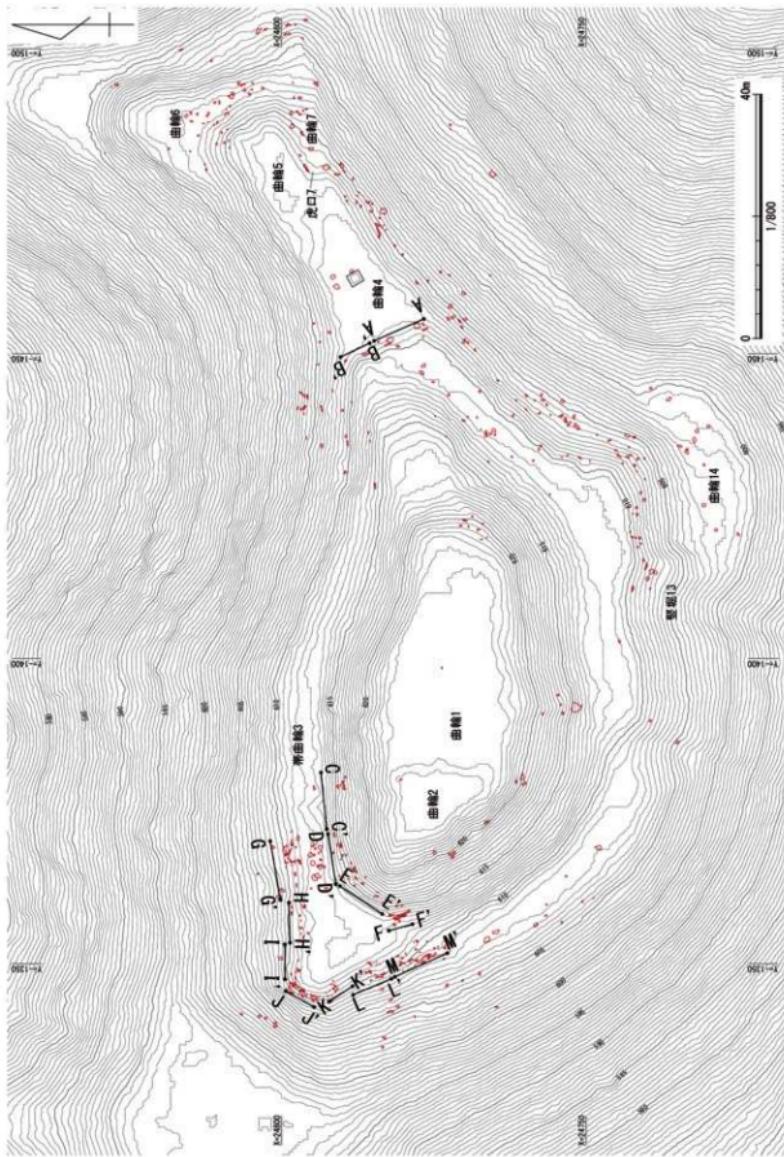
発掘調査を実施した曲輪5の周囲については、東側から南側斜面にかけて石材が分布する。その東側に位置する帶曲輪6上には石材が多数散在するため、曲輪5と6の間の斜面上に石垣が存在した可能性がある。さらに虎口7下部の南西斜面にも石材が分布する。

曲輪7から帶曲輪3の南側斜面にも石材が埋没して分布する。西側は腰曲輪14の上部斜面から堅堀13付近まで確認できる。これらは同一レベルで広い範囲に帯状に分布するため、石垣の存在が想定される。曲輪14平坦部にも上部からの転落石と想定される石材が分布する。

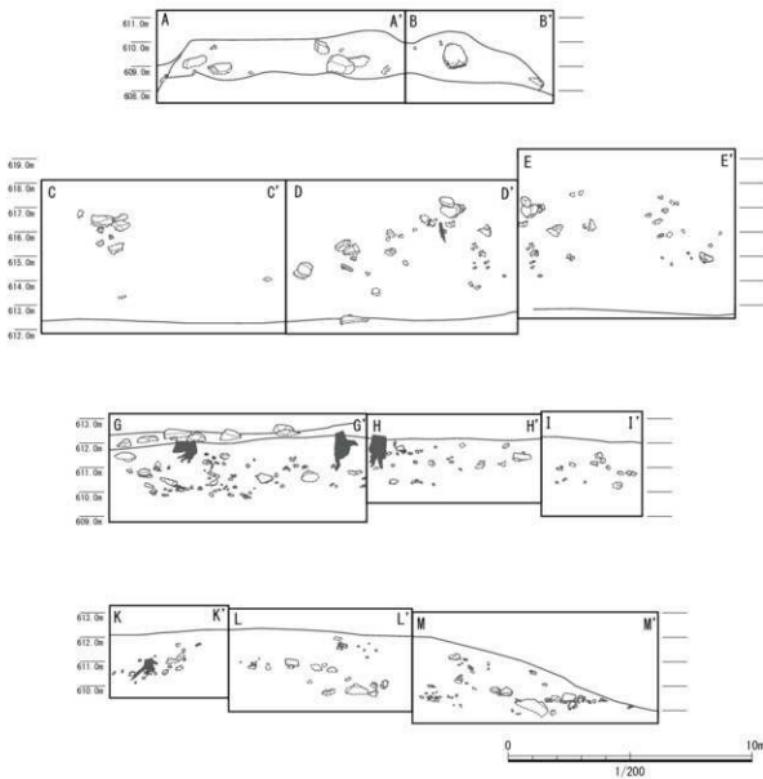
以上から、古川城跡山城地区の石材は城山の南側から東側斜面にかけて広く分布していることが分かる。特に中枢部と想定される曲輪2の下部斜面や、方形の樹形虎口7が存在する曲輪5周囲に重点的に存在している。さらに比較的の分布は薄いが曲輪3・4の南側斜面にも石材の分布が確認できる。また、曲輪4の西側斜面にも立石を意識した石垣が想定され、城郭内部において一定の区画を成していた可能性が想定できる。なお、曲輪2付近は古川城北麓に位置する高野集落やその先の増島城下から遠望できる。曲輪5付近は宮川対岸の拠点集落である古町付近から遠望できる。さらに南側は武家屋敷地の伝承がある平坦地群や旧五社神社が存在する。従って、往時には比較的近隣に位置する盆地内の主要な地点から古川城の石垣の存在を視認できた可能性がある。

### (2) 石垣の特徴（第21～38図）

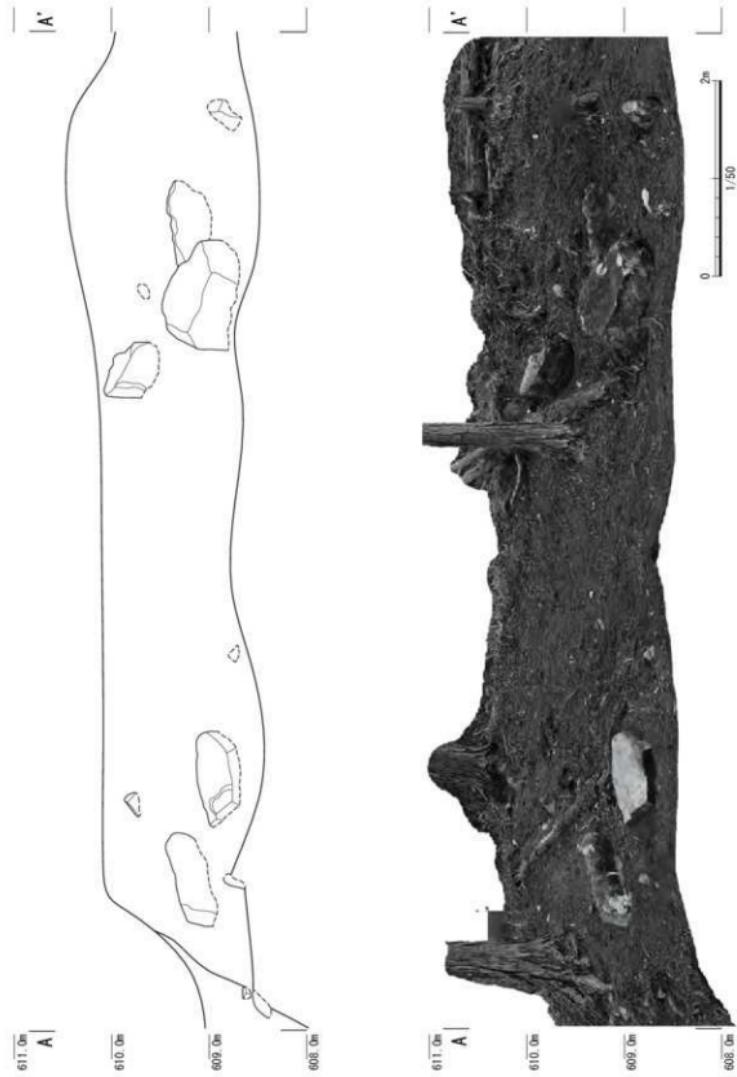
古川城においては、比較的石垣の残りが良い地区において写真測量を実施し、立面図・オルソ図を作成した。地表面観察で確認できる石垣は、明確に縦2段以上積まれたものが確認できない。また、



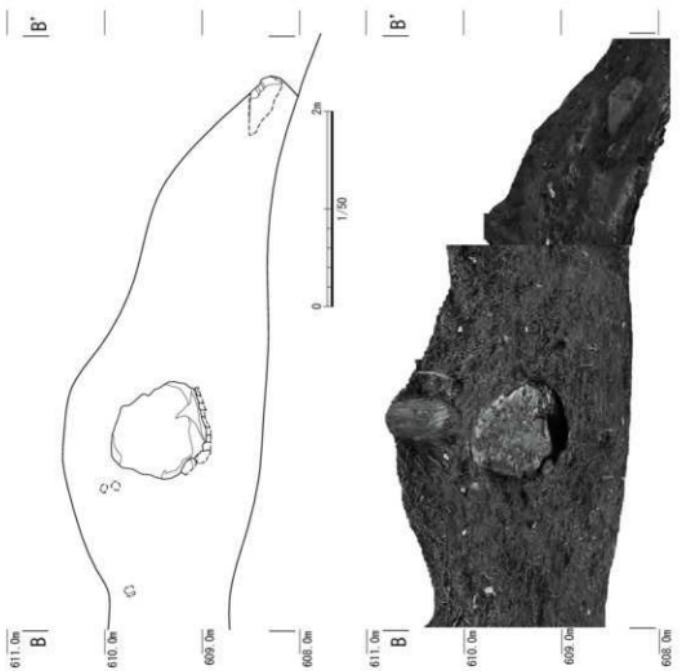
第20図 古川城跡 石材分布平面図・立面位置図



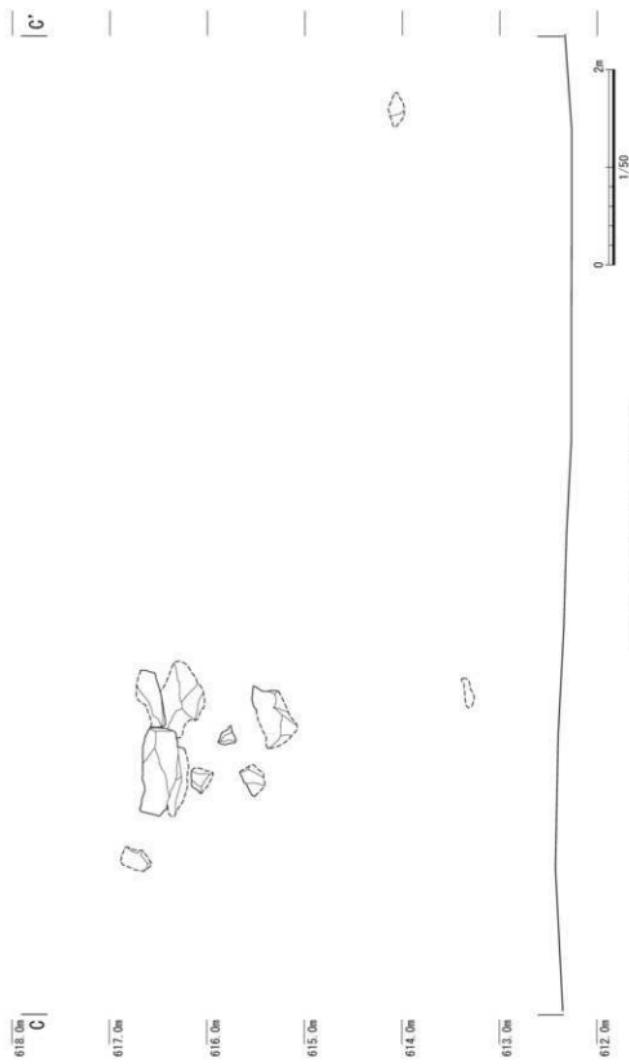
第21図 古川城跡 石垣立面割付図



第22図 古川城跡 AA' 石垣立面図・オルソ図



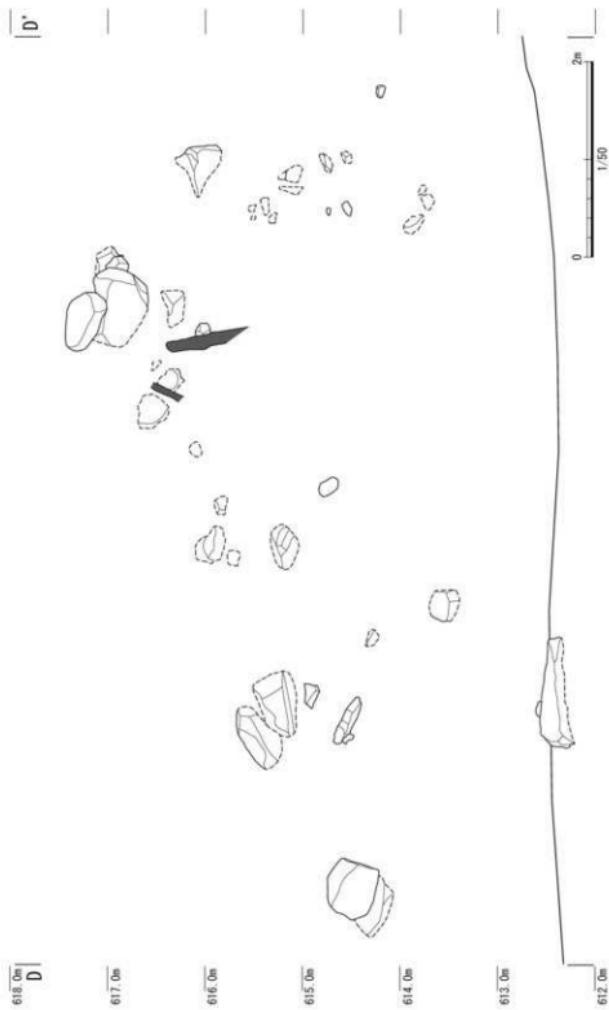
第23図 古川城跡 BB' 石垣立面図・オルソ図



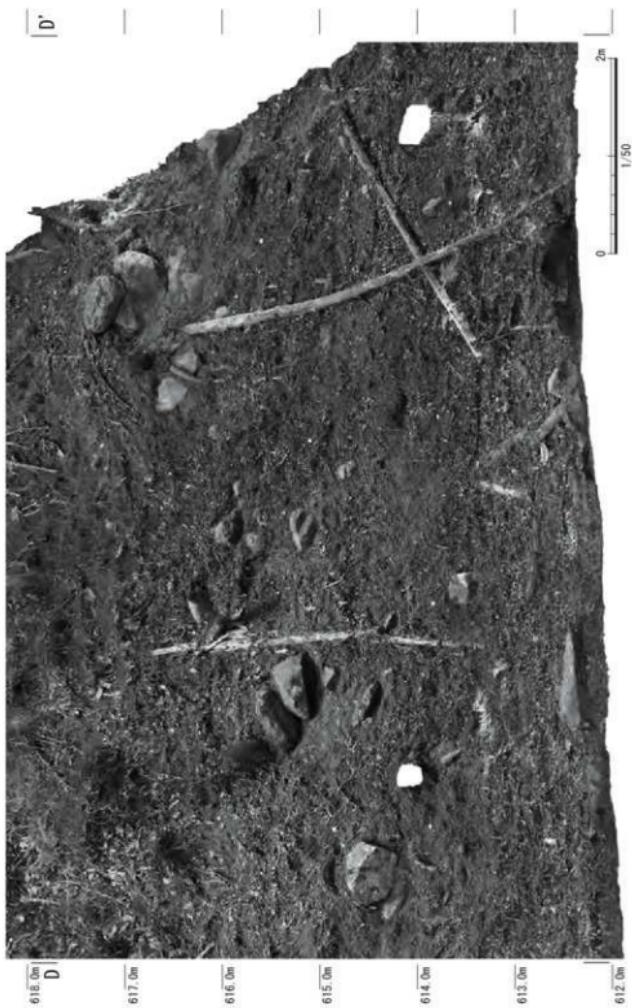
第24図 古川城跡 CC' 石垣立面図



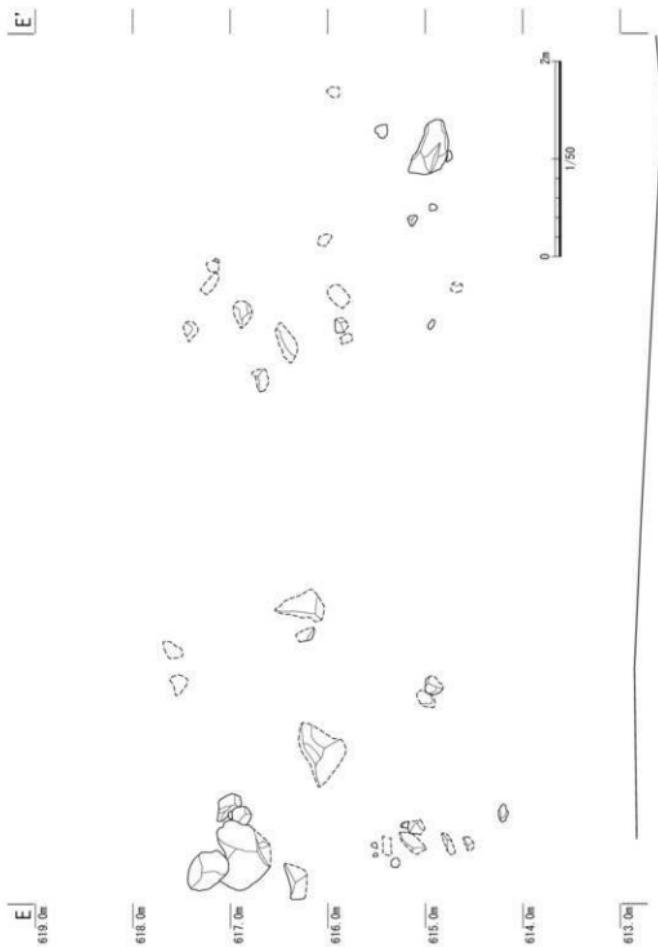
第25図 古川城跡 OC 石垣オルソ図



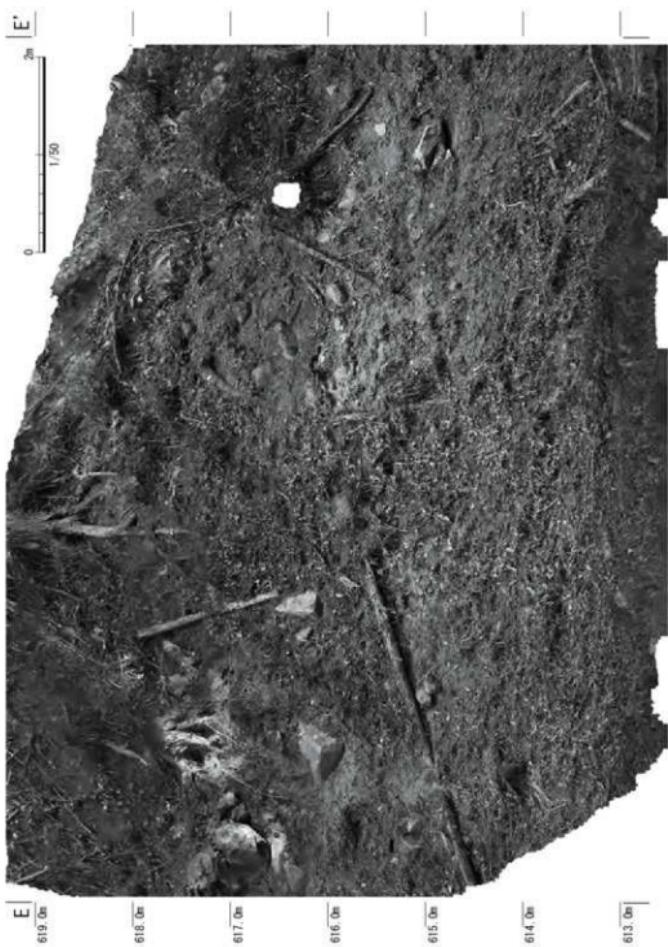
第26図 古川城跡 00' 石垣立面図



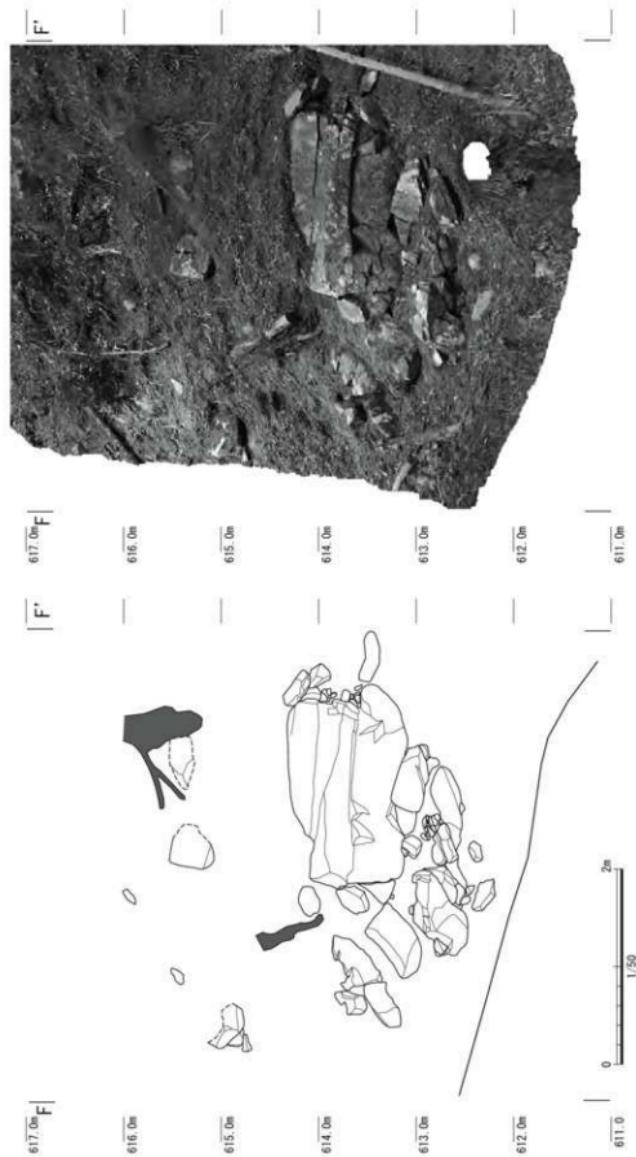
第27図 古川城跡 DD' 石垣オルソ図



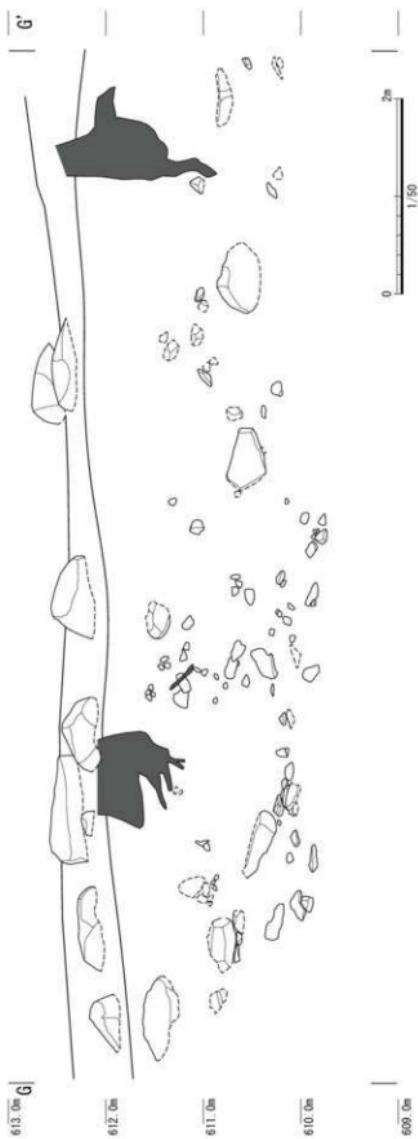
第28図 古川城跡 EE' 石垣立面図



第29図 古川城跡 E-E' 石垣オルソン図



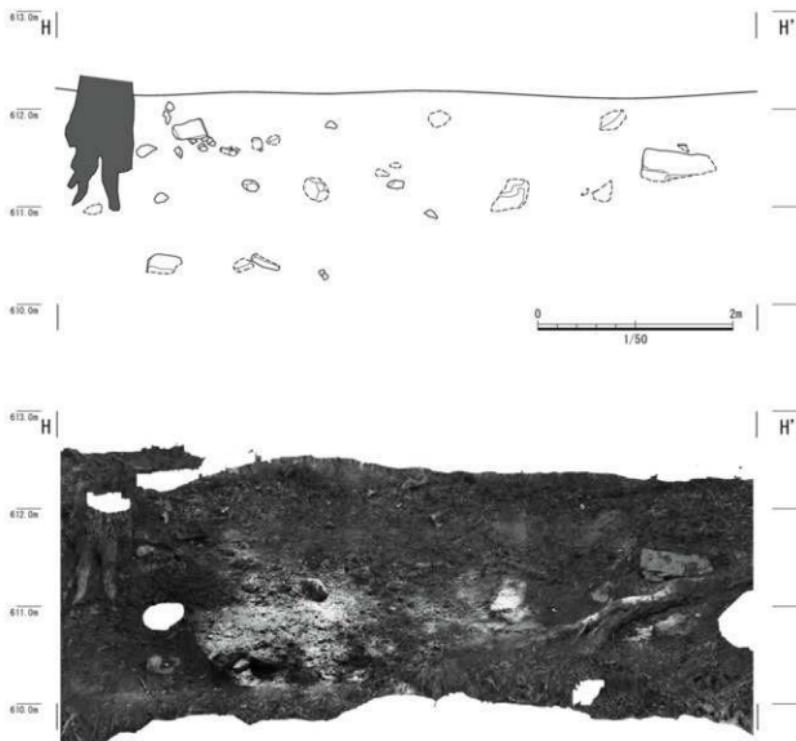
第30図 古川城跡 FF' 石垣立面図・オルソ図



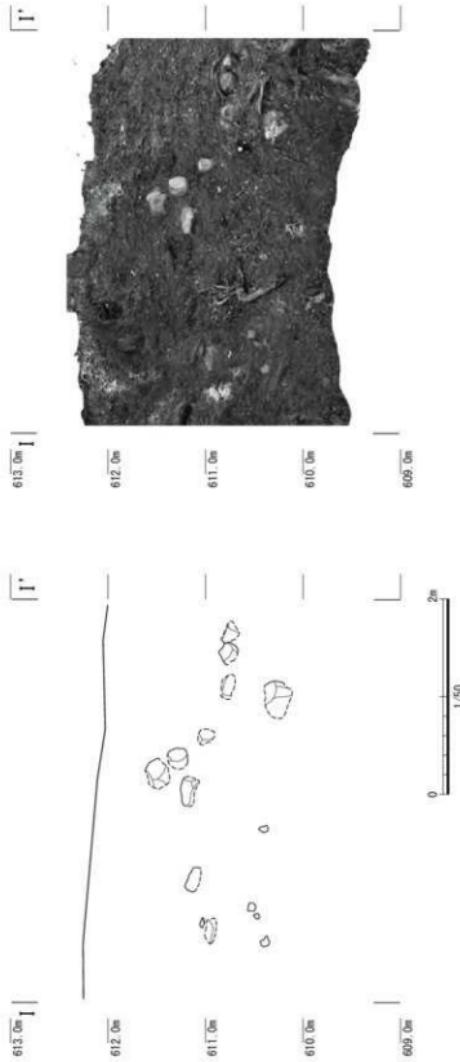
第31図 古川城跡 G-G' 石垣立面図



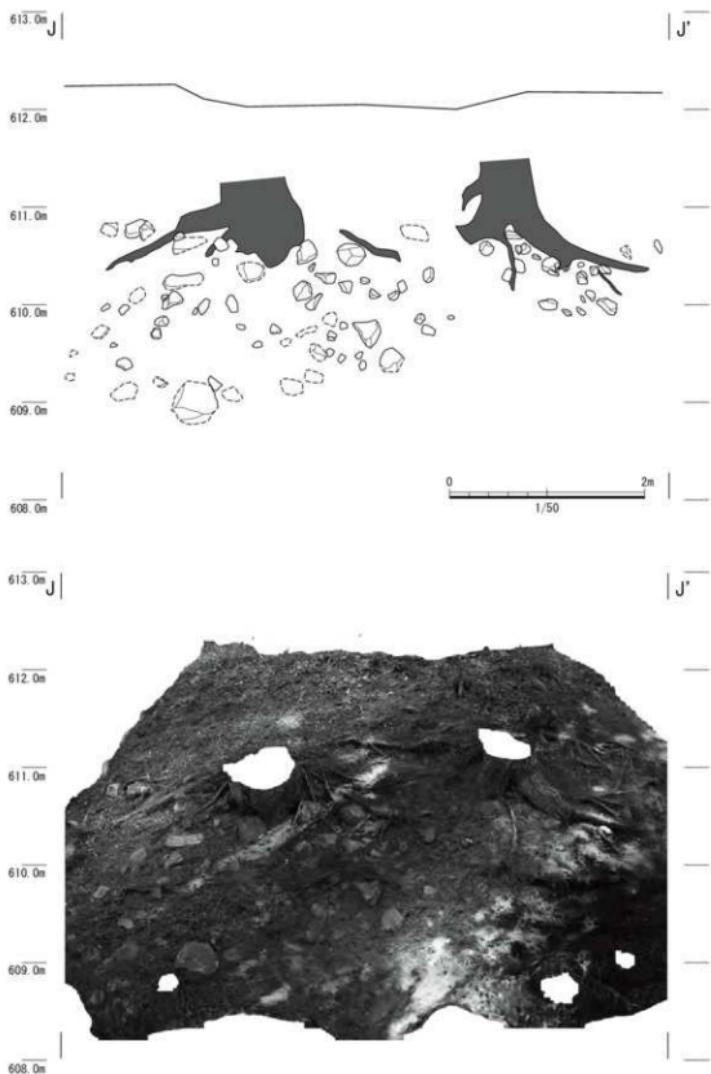
第32図 古川城跡 66' 石垣オルソ図



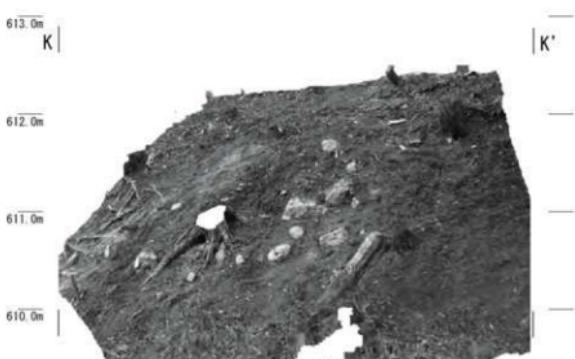
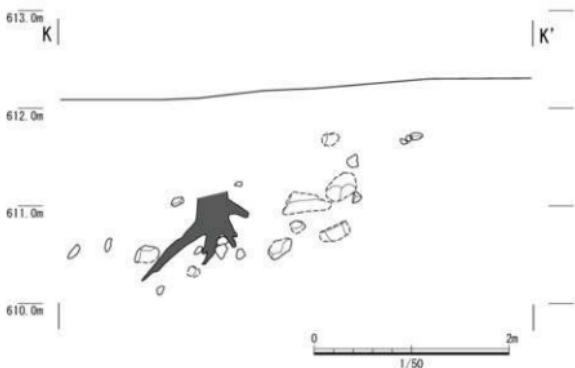
第33図 古川城跡 HH' 石垣立面図・オルソ図



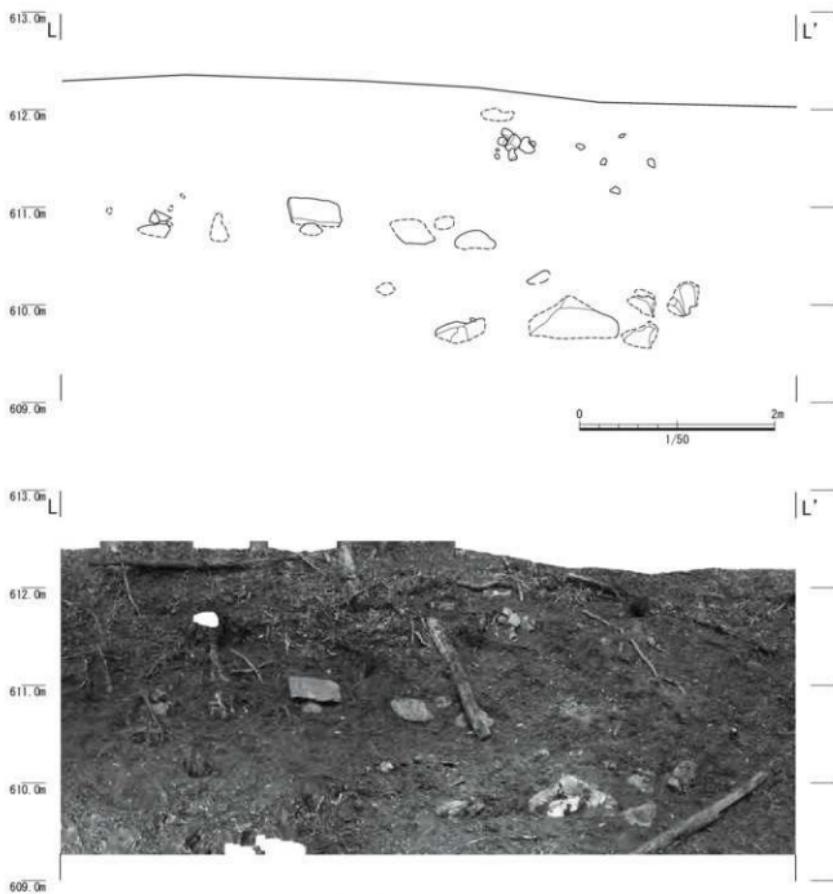
第34図 古川城跡 11' 石垣立面図・オルソ図



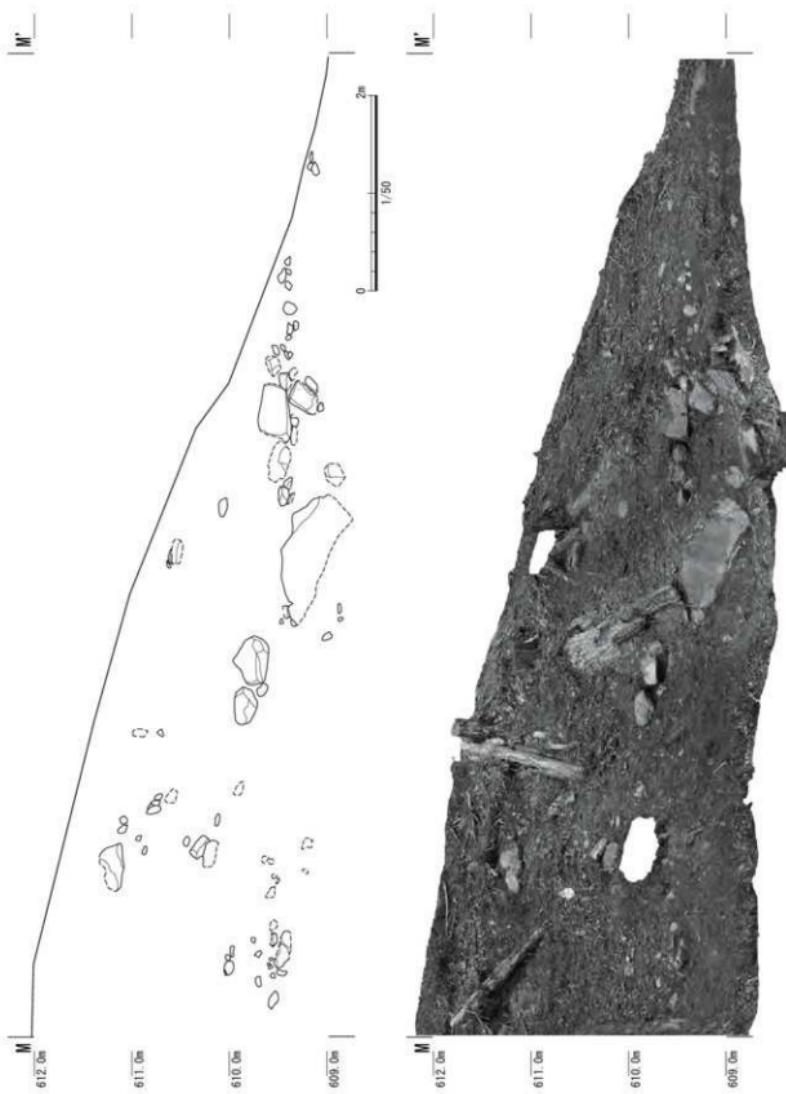
第35図 古川城跡 JJ' 石垣立面図・オルソ図



第36図 古川城跡 KK' 石垣立面図・オルソ図



第37図 古川城跡 LL' 石垣立面図・オルソ図



第38図 古川城跡 MM' 石垣立面図・オルソ図

基本的に自然石を使用したものである。立面図作成は発掘調査の対象地区である曲輪5周辺を避け、曲輪4西側及び曲輪2周辺を対象地区とした。

曲輪4西側段差（第22・23図）の所々に残存する石材はそのほとんどが倒壊・埋没している。ただし、1m程度の大きさの1石のみ立石している状況が確認できる。当該立石は根本に空隙が確認できる。さらに空隙の奥に小石が挟まっている。この小石は間詰石もしくは裏込め縫の一部である可能性が想定される。

曲輪2西側斜面（第24～30図）の石材は切岸の上部は確認できず、中部から帶曲輪3に近い下部にかけて確認できる。石材は大きいもので30～50cm程度である。いずれも表面近くまで石に埋没しているため、裏込め等は確認できない。しかし、下部の帶曲輪3の平坦地で確認できる石材は1m近いものがあり、これらの石材は上部の斜面からの転落石の可能性がある。

帶曲輪3下部斜面（第31～38図）の石垣は20cm程度のものが基本で、大きいもので30cm程度ものものがある。表面近くまで石に埋没しているため、裏込め等は確認できない。特に南側斜面の一部（第38図）に、列をもった石垣のまとまりが確認できる。

古川城跡の石垣は、地表面観察では部分的に確認できる程度であるため、詳細な構造の検証は困難である。しかし、石材の大きさの比較を行うと、樹形虎口7付近や曲輪2下部斜面で確認できる石材は1m近いものがあり、帶曲輪3下部斜面で確認できる石材は30cm程度である。城内の重要な区画には比較的大きな石材を用いた可能性が想定される。

石垣の構造は、全体的に土に埋没し、空隙が見えないことから間詰めや裏込め縫の想定が困難である。ただし、曲輪4西側の石垣は立石を意識し、根本には空隙が確認できる。石材の大きさとともに、構造についても、全体として一様ではない様相が想定される。

### 第3節 小島城跡

#### 1 遺構の分布と構造

小島城跡は、宮川とその支流太江川に挟まれた山頂に立地する。姉小路氏の一角・小島氏の居城と伝わる。尾根頂上の最も広い曲輪1を中心とした城郭遺構と、西側尾根の城郭遺構と2つのまとまりがある。主郭地区と西尾根地区に区分して報告する（第39～41図）。

##### （1）主郭地区

最も広いのが三角形状の曲輪1であり、ここを中心に城郭遺構がまとまる。曲輪1は主郭であろう。曲輪1の南辺は曲輪上端が直線であり、切岸となる斜面には人頭大以上の石が散在する。所々2石以上上下・左右に並んでいる状況を確認できる。また、東側の切岸には1m以上の巨石が散在する。こちらも数ヶ所は並んでいる状況である。北側は先端に向けて緩やかに下っており、尖る形状となっている。北側にも転石が認められる。

この曲輪1から東西に尾根が続く。東側には細長い曲輪2が接する。切岸の南端に、曲輪1から2へ降りてくる土星が認められる。曲輪2の南側切岸では、曲輪1寄りに人頭大の石が散在する。また、上端南辺の中央で張り出しがあり、一段下に曲輪3が認められる。

小島城の最高所は円形の曲輪4である。檜台と考えられる。曲輪上面は緩やかに下降するが、切り

立った切岸を巡らせて独立している。曲輪4の南側直下には帯曲輪状に曲輪5が巡る。曲輪3と曲輪5は人工的な崖みにより隔てられる。

曲輪4からは北側と南側に2本の尾根が派生する。北側尾根には小曲輪と細長い曲輪6が続く。その下は作業道終点の駐車場である。曲輪1へ通じる駐車場北側斜面には、2本の堅堀を配置する。また、尾根の先に長大な堀切7と土壙、3つの連続する小曲輪と続き、城域を区切る。南側尾根には土壙で直角に折れる橋形状の虎口8が設定されている。さらにその直下に堅堀9と土壙10により通路設定がなされる。それより先は作業道により尾根が削平を受けているものの、20m離れて堅堀11、30m離れて堅堀12、さらに70m離れて堅堀13が南側斜面にのみ認められる。

曲輪1から西側尾根へは曲輪14に接するが、2段の曲輪と切岸により隔てられる。この間と南側切岸には、曲輪1の南側切岸から続くように人頭大以上の石の散在が認められる。曲輪14の南西端はコの字状に開口しており、虎口15が設定される。虎口15の通路西側には1m以上の石材が並ぶ。その背面にあたる曲輪14の北西側斜面には、隅部が算木積みを志向した高さ2mほどの石垣が残る。虎口15からは南西に続く尾根伝いに傾斜している。この傾斜地の東側には切岸、西側には曲輪が認められ、下方の小曲輪群をつなぐ通路状の曲輪として設定されたものと考えられる。その先は小曲輪を1つ経て、連続する小曲輪群16につながる。この小曲輪群16から虎口8まで幅1~2mの通路状の帯曲輪が伸びる。虎口8と直結していることから城郭遺構と考えられる。

#### (2) 西尾根地区

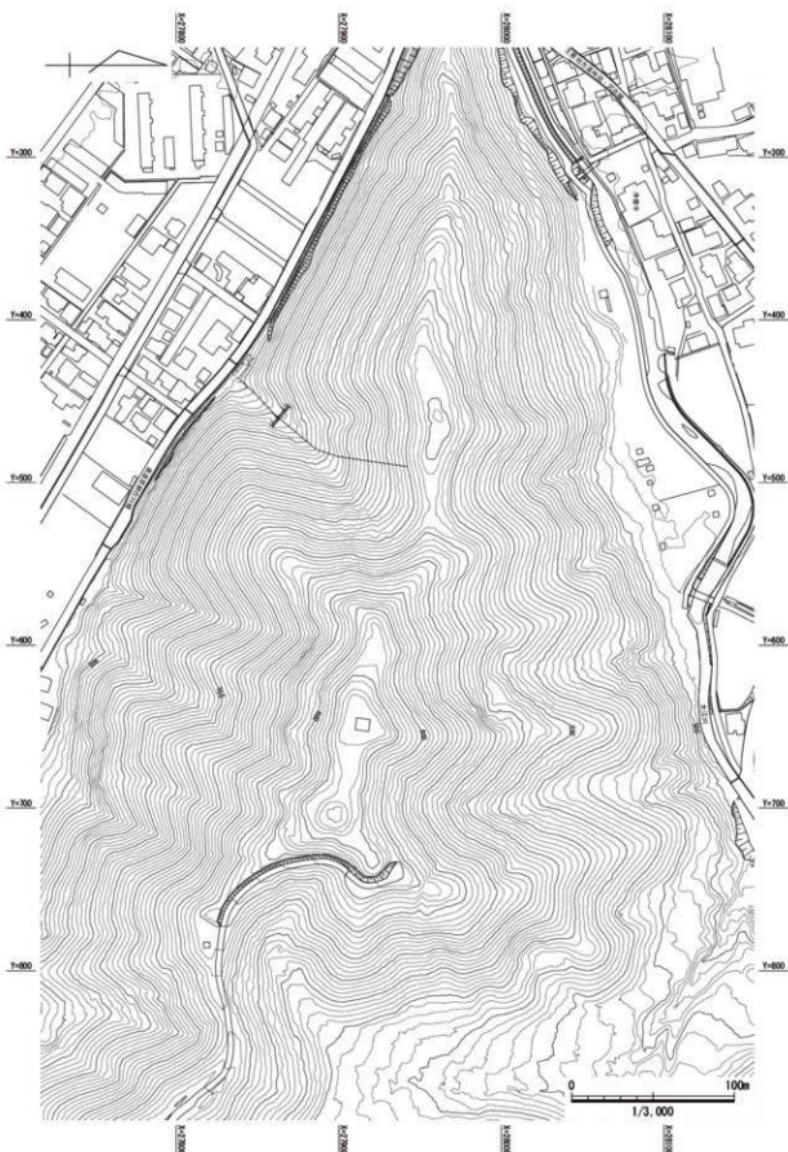
曲輪14からさらに西側の尾根には、高低差10m、直線距離30mを隔てて9つの連続する小曲輪を経て尾根上に設定された細長い曲輪18を配する。この小曲輪の5つ目と6つ目には東側に土壙を配置し、さらにその外側に2本の堅堀を配置する。曲輪18の北側には帯曲輪がある。曲輪18は、西側の2段の小さい段差を経て曲輪19と接する。曲輪19の西側には土壙20を配置し、その左右に両堅堀を配置する。北側の堅堀からは2つの連続する小曲輪に達し、南側の堅堀下方には通路があり、それを介して曲輪21の南側に達する。土壙20は、その中央から尾根に沿って伸びており、T字状を呈する。その先端はやや北側に折れて傾斜し、曲輪21につながる。そこから尾根沿いに5つの小曲輪が連続し、土壙状の高まりを伴う堀切22に達する。その間の小曲輪の北側斜面には細長い曲輪群23が接する。その最下部の曲輪の西端には2本の堅堀24が接する。堀切22からは、2つの小曲輪が続き、城域を区切る。

#### (3) その他の遺構

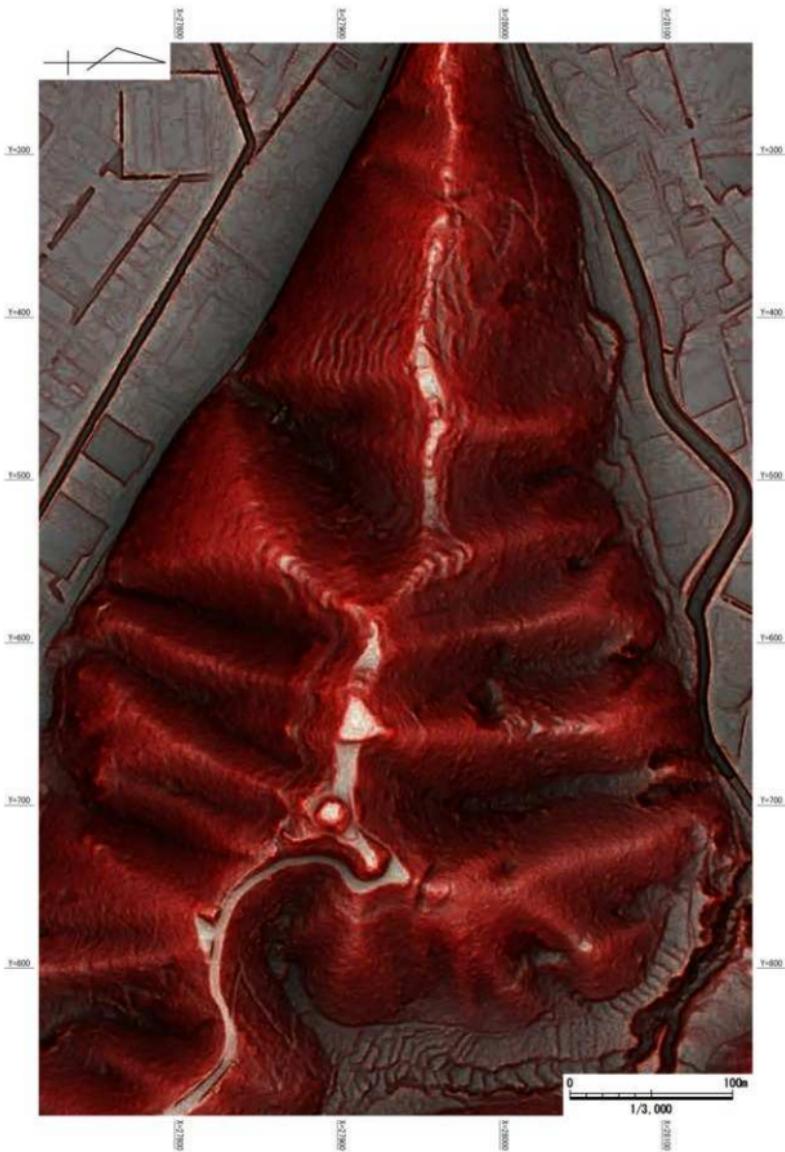
小島城跡の西尾根地区の麓には、径30mほどの半円形の平坦地25が認められる。また、北麓を流れる太江川が北側に膨らんだところに、広い平坦地26も認められる。平坦地26では土師器皿の細片1点が採集された。

#### (4) 特記事項

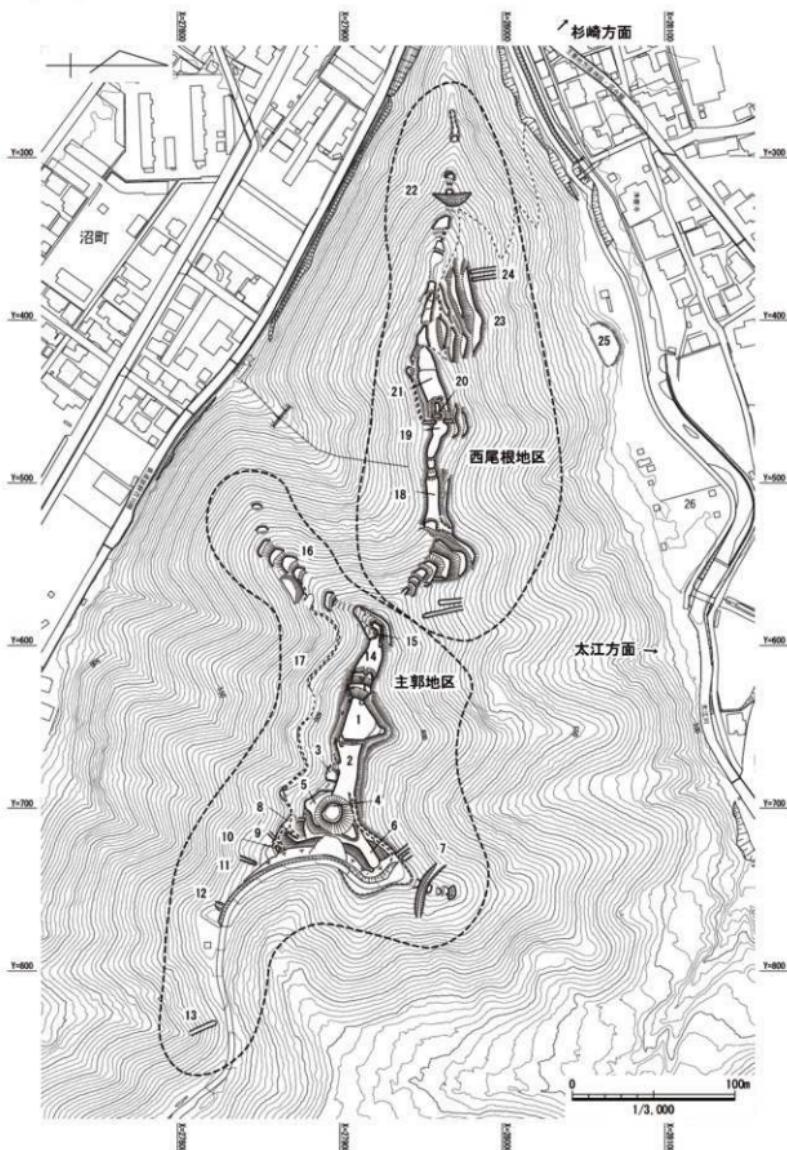
小島城跡で象徴的な遺構は、主郭地区の西端に位置し、南側に開口した虎口15とその背面の算木積みを志向した石垣である。主郭と想定される曲輪1の西側切岸及び南側切岸にも地表面に石垣を確認することができる。また、曲輪1から東に位置する曲輪2との間の切岸にも1m以上の石材を用い



第39図 小島城跡詳細地形測量図



第40図 小島城跡微地形表現図



第41図 小島城跡遺構配置図

た石垣がある。主郭地区の東側では、曲輪4直下の虎口8も南側に開口する。さらに虎口8からは虎口15の下方に位置する小曲輪群16と帶曲輪17で接続する。一方、小島城跡で最も大規模な堀切7は主郭地区の北尾根を遮断する。これらから、現状で確認できる主郭地区の虎口・通路・石垣等は南側に意識が向き、対して北側は堀切や切岸で遮断する傾向を看取できる。

これらに対し、西尾根地区は尾根筋の曲輪18・19・21などの北側直下に細長い曲輪群が接続し、その両脇に2本ずつ豎堀を配置する。他方、南側斜面には城郭遺構を確認できない。現状で確認できる西尾根地区的遺構群は、北側に意識が向いている。

以上、主郭地区が石垣や虎口で構成されるのに対し、西尾根地区は曲輪や土塁など土造りのみの城郭遺構で構成される。また、主郭地区が南側を、西尾根地区が北側を意識して城郭遺構を構築している。小島城跡の遺構配置には、構造の違いが認められる特徴がある。

## 2 石垣の現況

### (1) 分布の状況（第42図）

小島城跡の石垣は主郭地区内に分布する。曲輪1やその東側に位置する曲輪2、西側に位置する曲輪14・虎口15付近にまとまって分布する。曲輪1は東西の斜面及び南側斜面に石材が散在し、所々で石材の並びが確認できる。北側斜面は一部の集石を除いて分布は希薄である。南側斜面の中央部付近については主郭の平坦地から標高3m程度下の付近に並びが多く確認できる。一方、南側斜面の端部は東西側の斜面に沿って石材が分布するため、東西側斜面との連続性が想定できる。南側斜面には転石と想定される單一の埋没石が多数散在している。石材の大きさは20～30cm程度のものが多い。

曲輪1東側斜面には石が並んでいる状況が確認できる。現在の遊歩道の階段が中央を通るためある程度の改変が想定されるが、曲輪1平坦地の50cm下にまとまった並びが確認できる。石材は20～30cm程度の物が多いが、大きいもので1m近いものがある。また、数石程度であるが北側尾根にも埋没した石材が確認できる。一部、南側斜面にかけて石の並びが連続している状況が想定できる。

曲輪1西側、曲輪14の間は2段程度の小規模な平坦地と切岸によって構成されている。この切岸の南側部分を中心に石材が分布する。2段とも南側斜面の石の並びに対応している。東側斜面と同様に、南側斜面との連続性が想定できる。

曲輪1東側に位置する曲輪2は南側斜面の一部に石材が確認できる。東側は曲輪3との境付近まで分布している。石材の大きさは20～30cm程度のものが多く、並びは2・3石程度である。ほとんどの石材は斜面に埋没している。

曲輪1西側に位置する曲輪14・虎口15周辺にも多く石材が分布する。曲輪1と虎口15の間の南側斜面は並びが確認できないが石材が密に分布する。曲輪14北西部にもまとまった石垣が存在する。曲輪14の西側斜面から虎口15にかけて、下部の1石程度であるが同レベルで並びが想定できる。南側開口部の虎口15について、内構西側に立石が確認できるが、東側は明確ではない。

なお、虎口15の南西側斜面にも多く石材が分布するが、いずれも安定斜面の地表に存在することから、曲輪14もしくは虎口15からの転落石と想定される。さらにその下部の標高585m～590m付近は岩盤の露頭が多く確認できる。この付近の石材は、曲輪14の北側斜面に見えるまとまった石垣と同質の砂岩であることから、石材の採取場所の可能性が想定できる。

以上から、小島城の石材分布は曲輪1を中心として山塊の南側及び西側を中心に確認できる。これ

らはいずれも宮川や古川盆地方面を意識したものと想定される。

#### (2) 石垣の特徴（第43～76図）

小島城の石垣は、古川城跡と比較すると残存状況が良く、縦に積んだ状況も確認できる。そのため立面図・オルソ図（第43～65図）に加え、断面図（第66～76図）を作成した。断面図の位置は一定間隔において任意で設定した。

小島城跡において特徴的なのが、曲輪14北側の石垣である（第44～46図）。虎口15の背面に築かれ、西・南側斜面下部の石の並びから西から南側斜面まで廻って構築されていた可能性が想定される。この区画の石垣は砂岩の自然石を基本としたもので、石材の全長は大きいもので1m近いものがある。石垣の北西隅は、風化によって形成された円型部分を隅部として利用し、算木積みを志向する長短の組み合わせが確認できる。石材は全体に剥離が見られ、クラックが生じている石材もある。石材同士は空隙が多く見え、奥には小石が確認できる。これらの小石は間詰め石もしくは裏込め礫の一部である可能性が想定できる。また、各石垣の断面形状を確認すると（第67図）、角度がついたものであり、扁平に積むのではなく、奥に向かって下がっている様子が分かる。主郭東側斜面の石垣（第63～65、67図）の一部にも空隙が確認でき、断面形状から角度がついた状況が確認できる。

曲輪1南側斜面（第47～62、68～76図）について、西部に一部空隙を持つ石積みが確認できるが、他の区画については、基本的に地表付近まで埋没している。石材の大きさは大きいもので30cm～50cm程度である。なお、曲輪1南側斜面の断面形状を確認すると、積まれた石垣が殆ど無いことから石垣の角度の推測は困難であるが、同じ斜面にレベル毎に複数の石列が確認できる。そのため、往時は数段に亘って小規模な石垣が存在した可能性が想定できる。

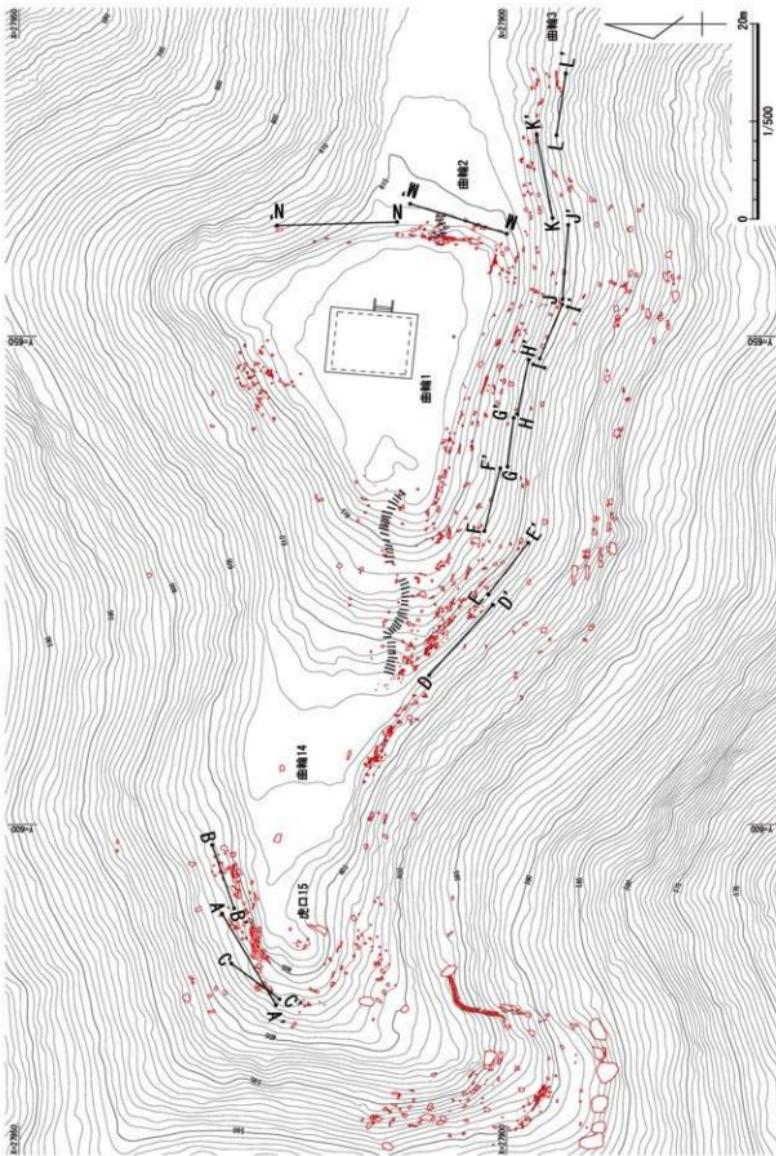
現状の小島城の石垣の状況からは、地区によって石材の大きさや空隙の有無、角度等が異なる。また、石材の大きさを比較すると、曲輪1南側斜面の石材は全体的に小さく、曲輪1東側・曲輪14・虎口15付近の石材は1m近いに大きいものがある。石垣の構造については、曲輪1南側斜面は、殆どの石材が地表まで埋没している状況であり、推測が困難である。一方、曲輪14付近の石垣は露出した部分に空隙が多数確認できるため、間詰石もしくは裏込め礫の存在が想定できる。曲輪1東側の一部についても同様であった可能性がある。また、隅部について、曲輪1周辺では確認できないが、曲輪14等の北西側の石垣をはじめとして、西側の区画は隅の構造を意識していることが確認できる。このような差異から、石垣の分布や構造が城内の区画ごとに異なっていたあり方が想定できる。



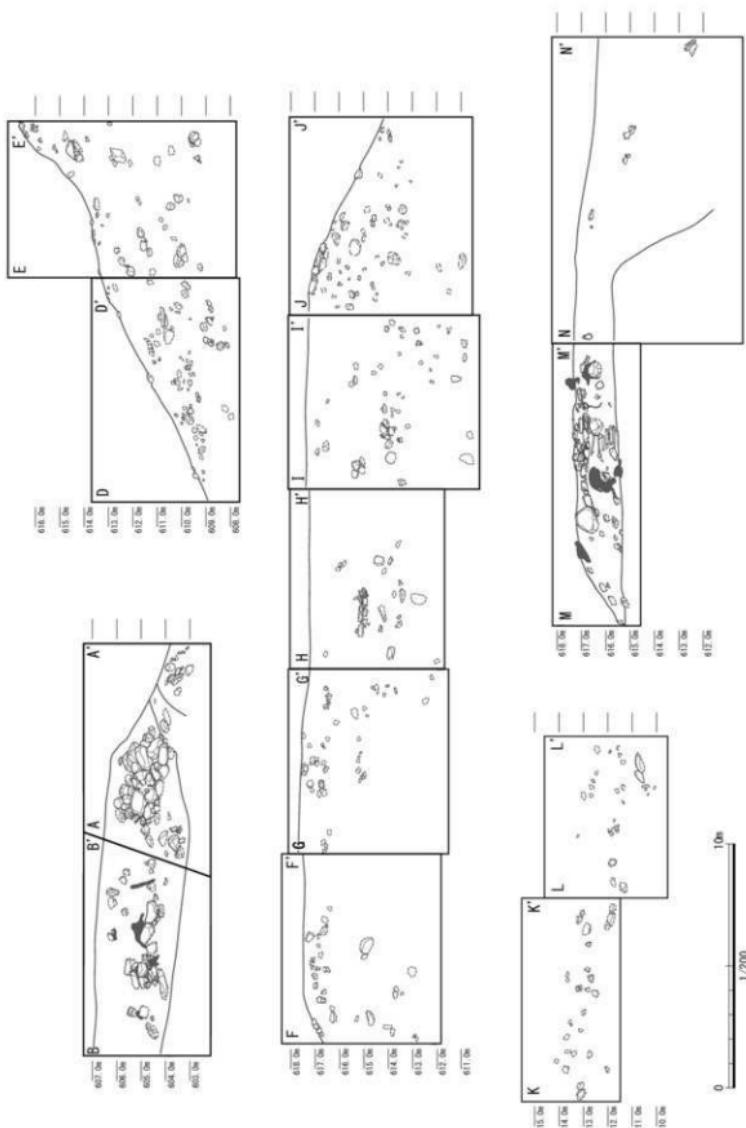
写真3 小島城跡 石垣測量指導の様子



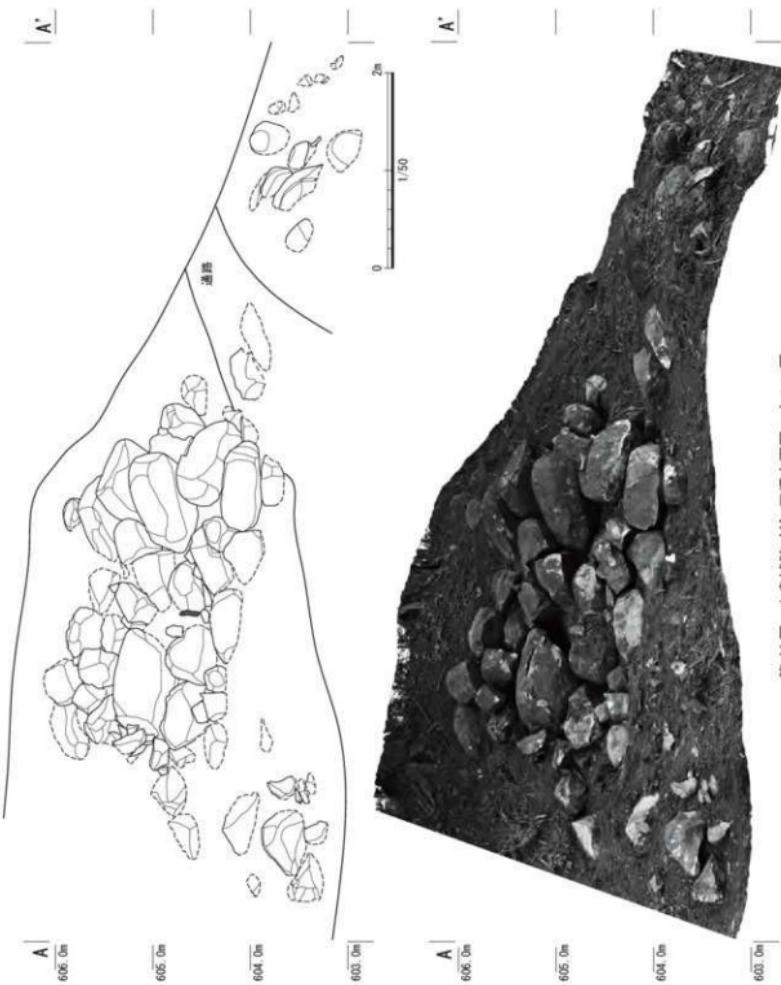
写真4 小島城跡 石垣測量の様子



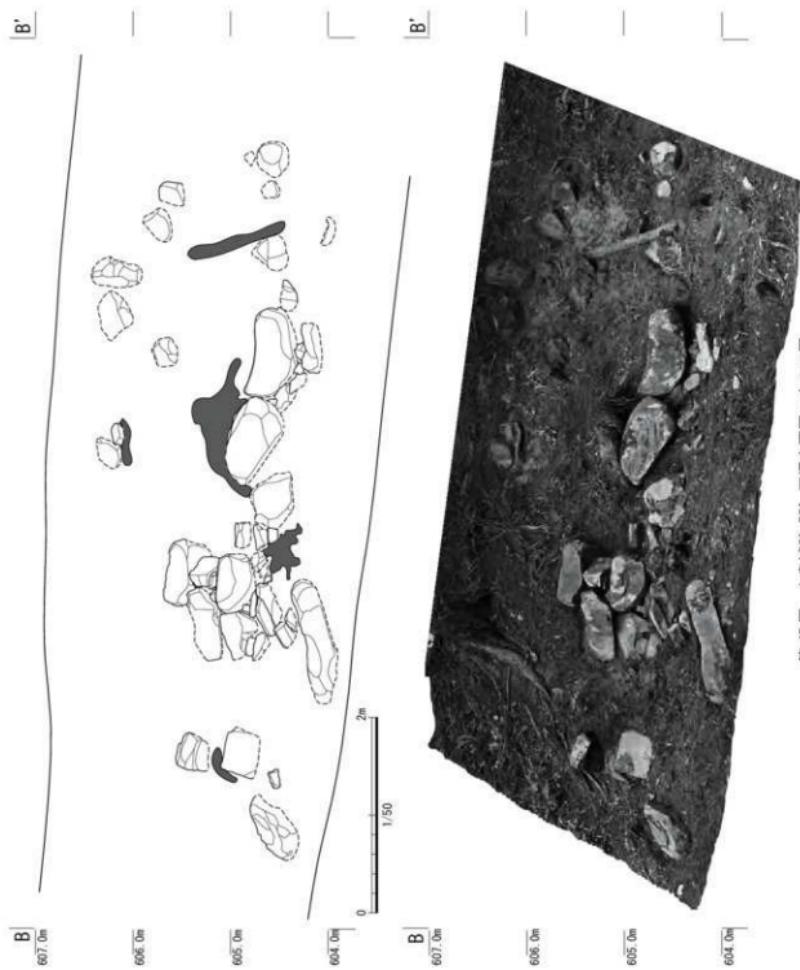
第42図 小島城跡 石材分布・立面位置図



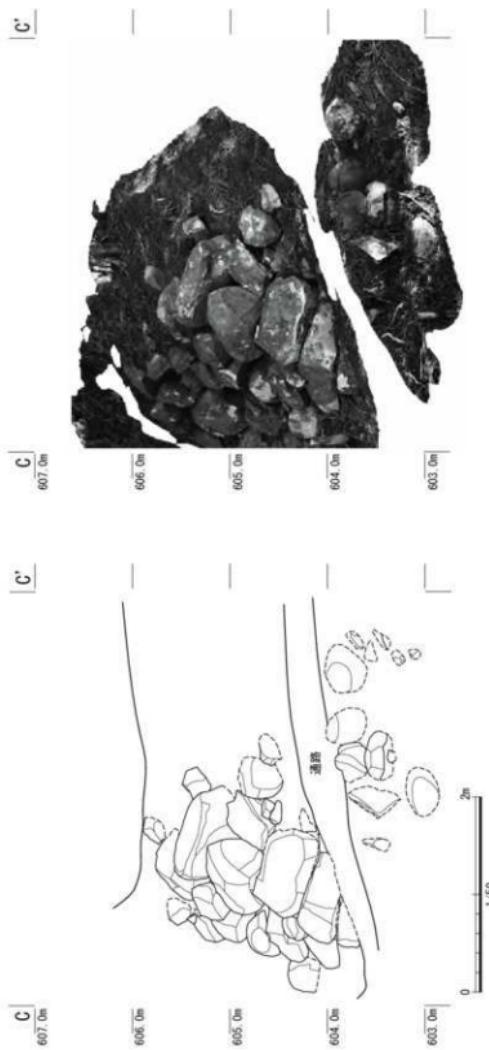
第43図 小島城跡 立面斜付図



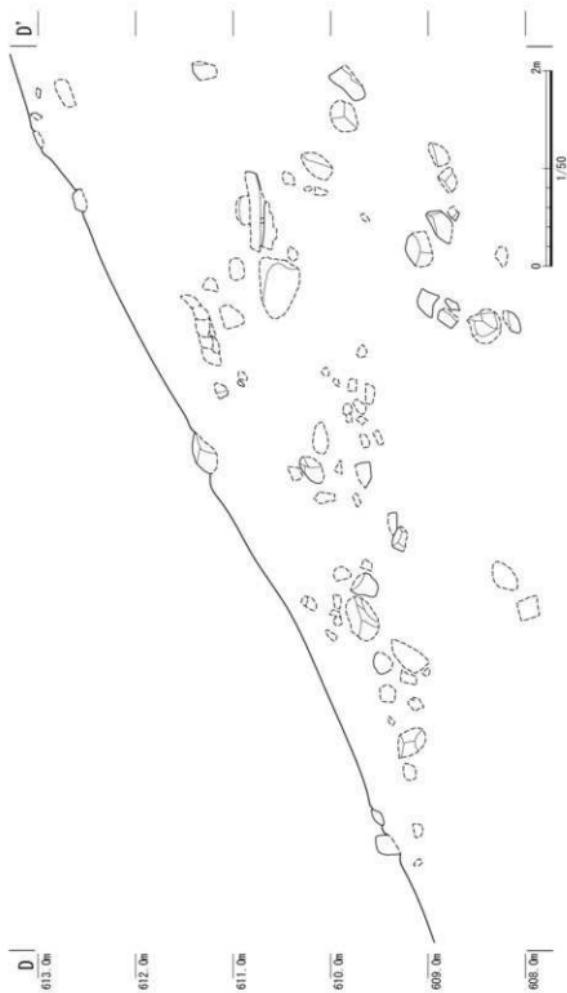
第44図 小島城跡 A-A' 石垣立面図・オルソ図



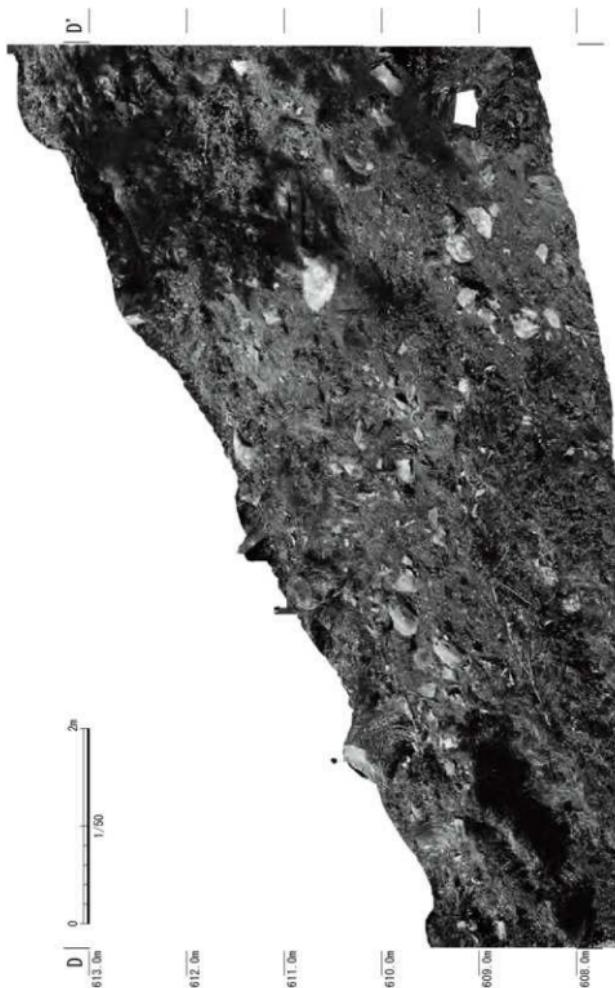
第45図 小島城跡 88° 石垣立面図・オルソ図



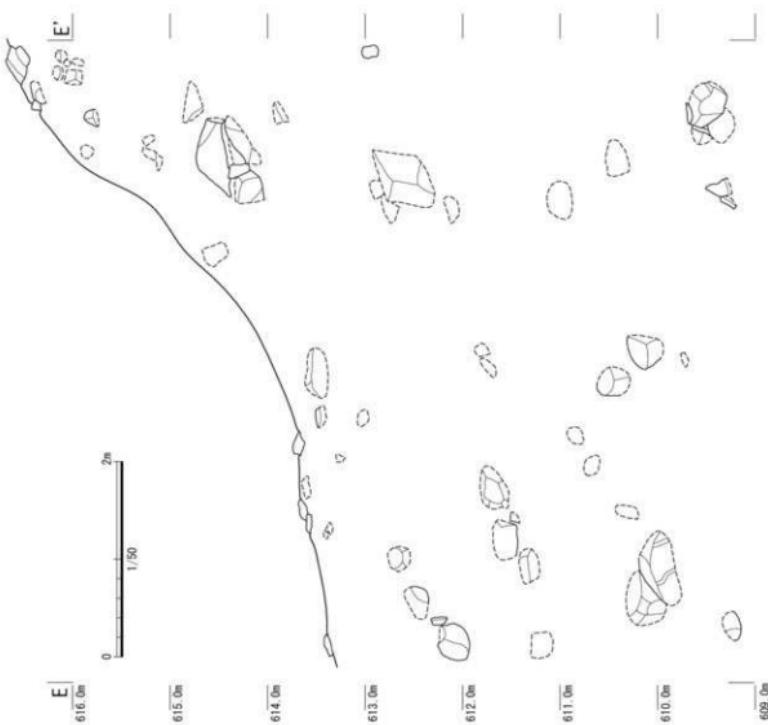
第46図 小島城跡 CC' 石垣立面図・オルソ図



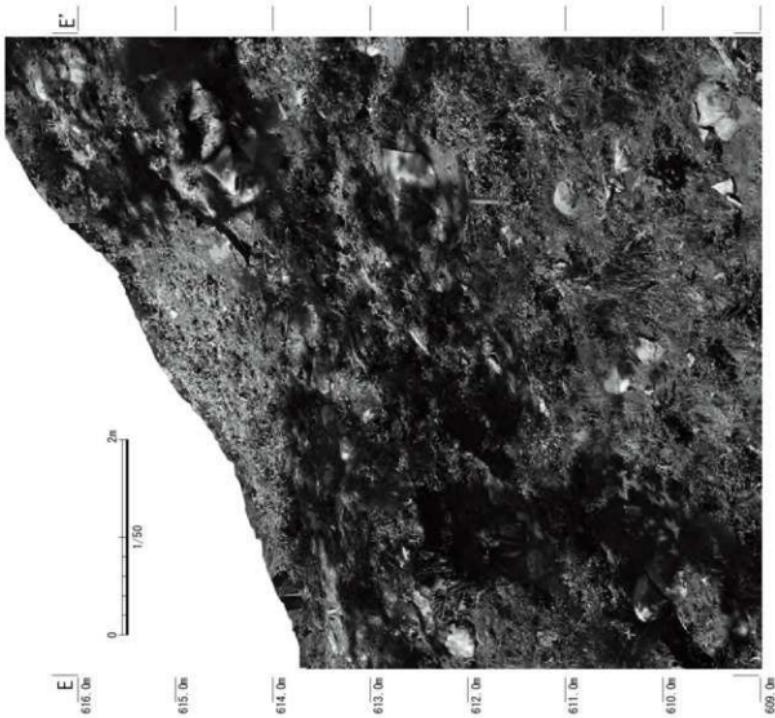
第47図 小島城跡 DD' 石垣立面図



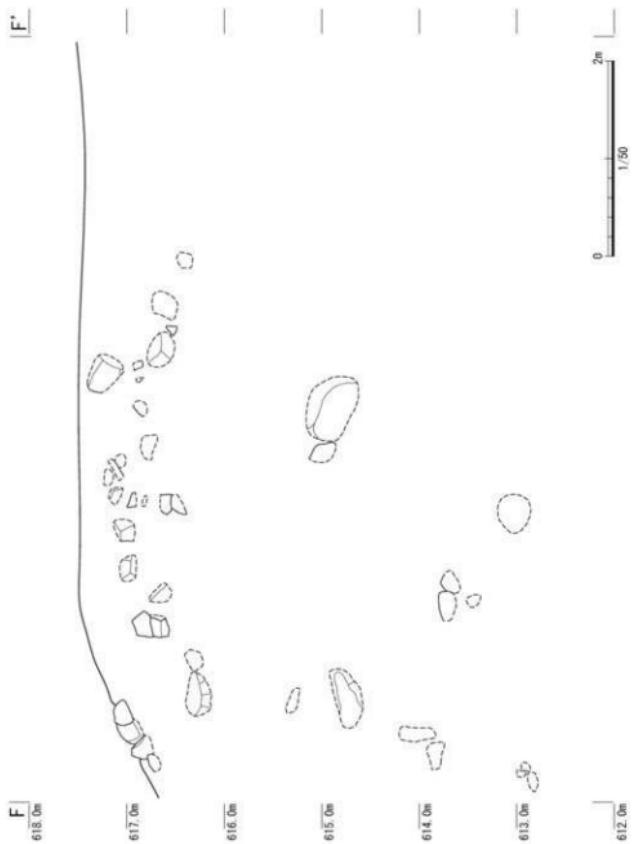
第48図 小島城跡 DD' 石垣オルソ図



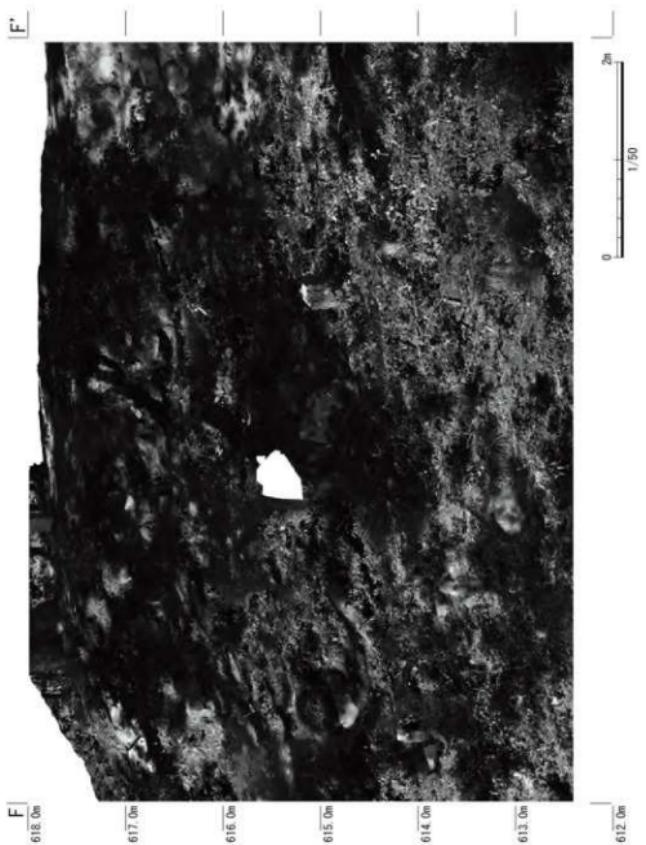
第49図 小島城跡 EE' 石垣立面図



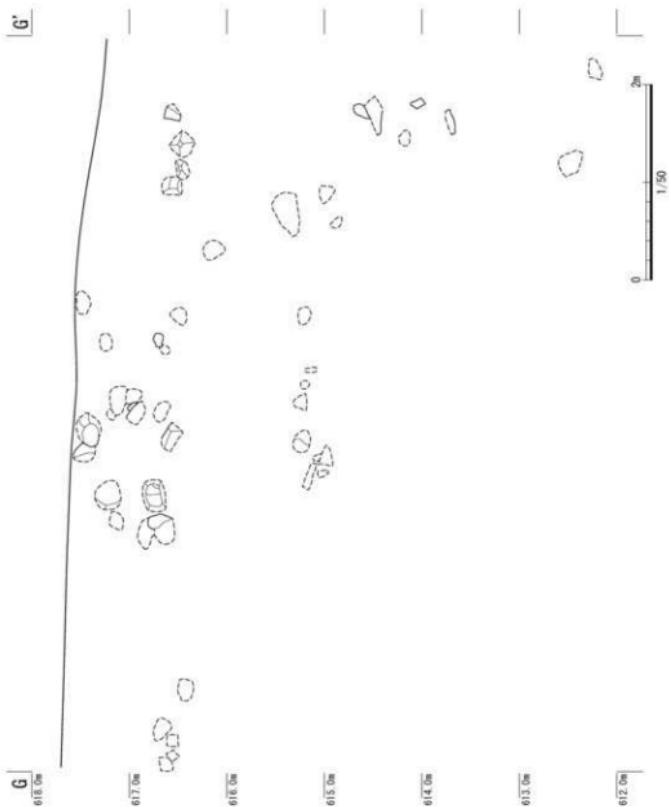
第50図 小島城跡 EE' 石垣オルソ図



第51図 小島城跡 FF' 石垣立面図



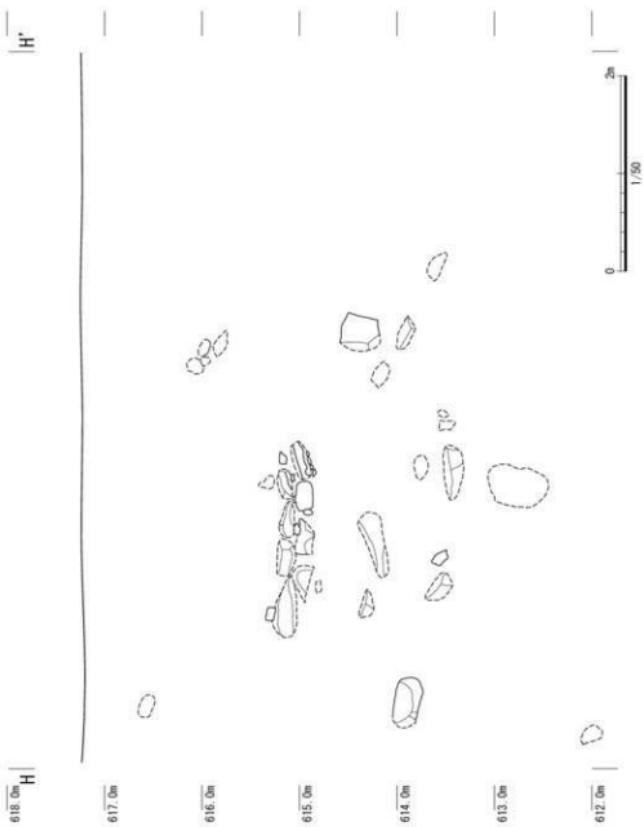
第52図 小島城跡 FF' 石垣オルソ図



第53図 小島城跡 GG' 石垣立面図



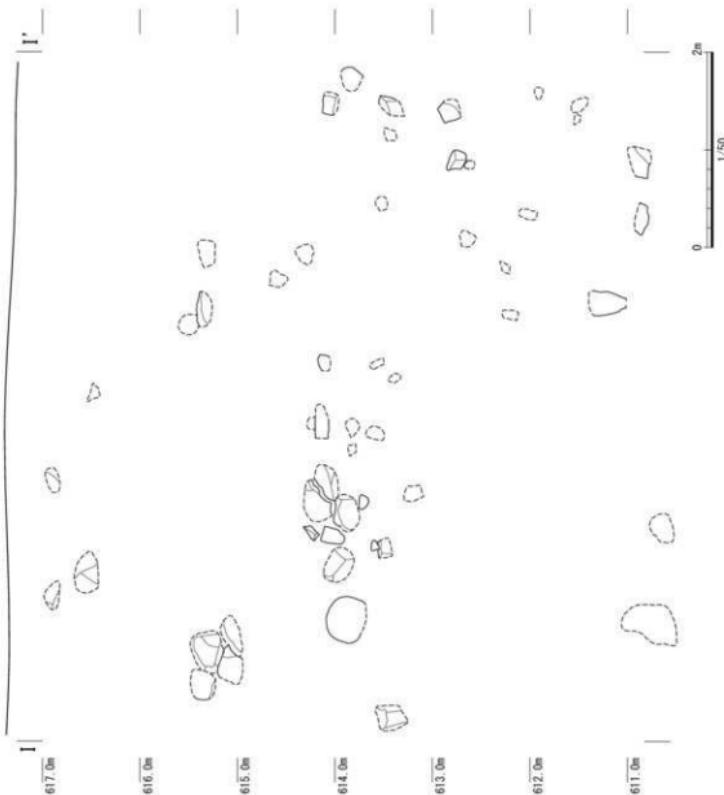
第54図 小島城跡 66° 石垣オルソ図



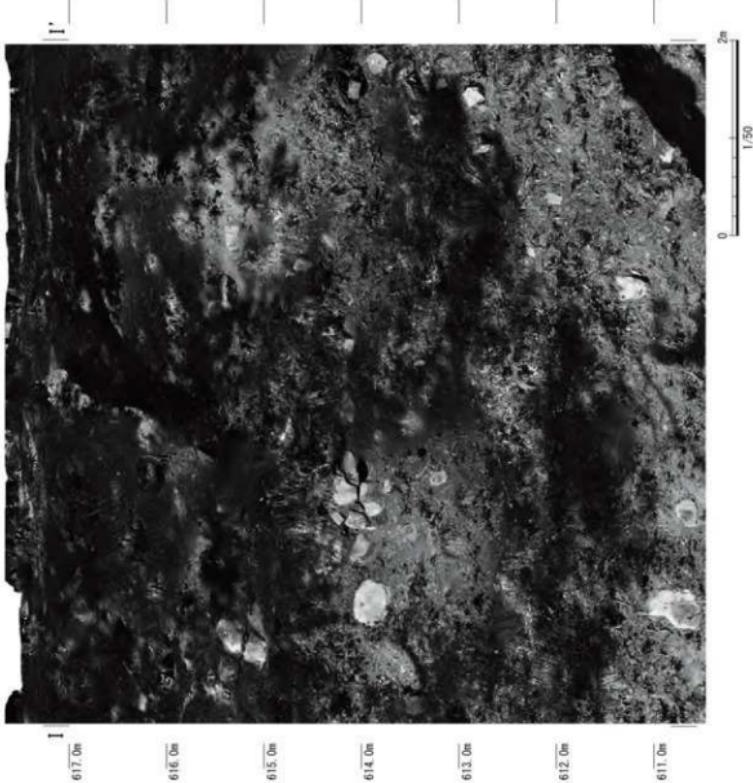
第55図 小島城跡 HII' 石垣立面図



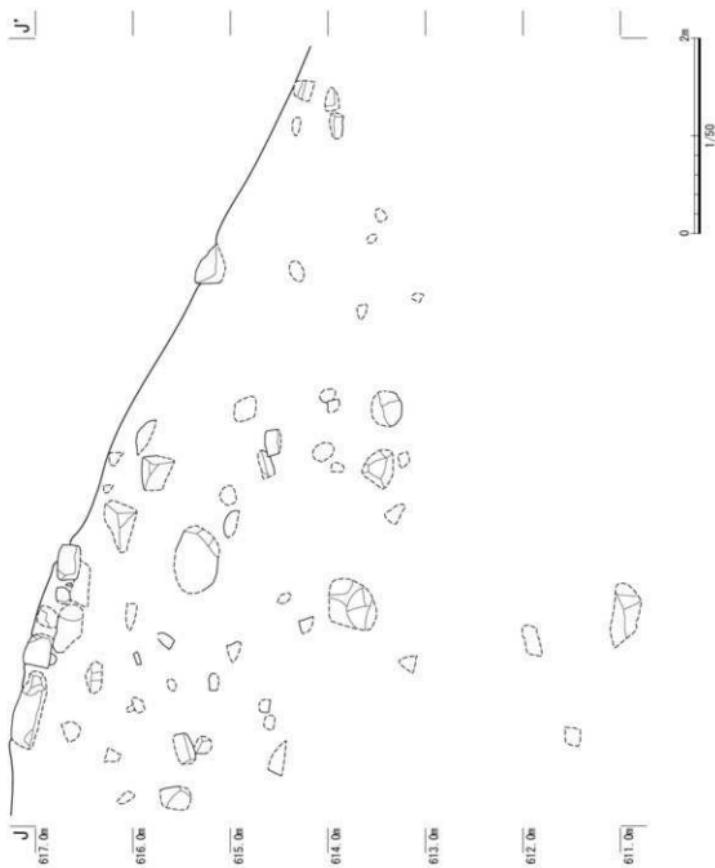
第56図 小鳥城跡 HH' 石垣オルソ図



第57図 小島城跡 11' 石垣立面図



第58図 小鳥城跡 11' 石垣オルソ図



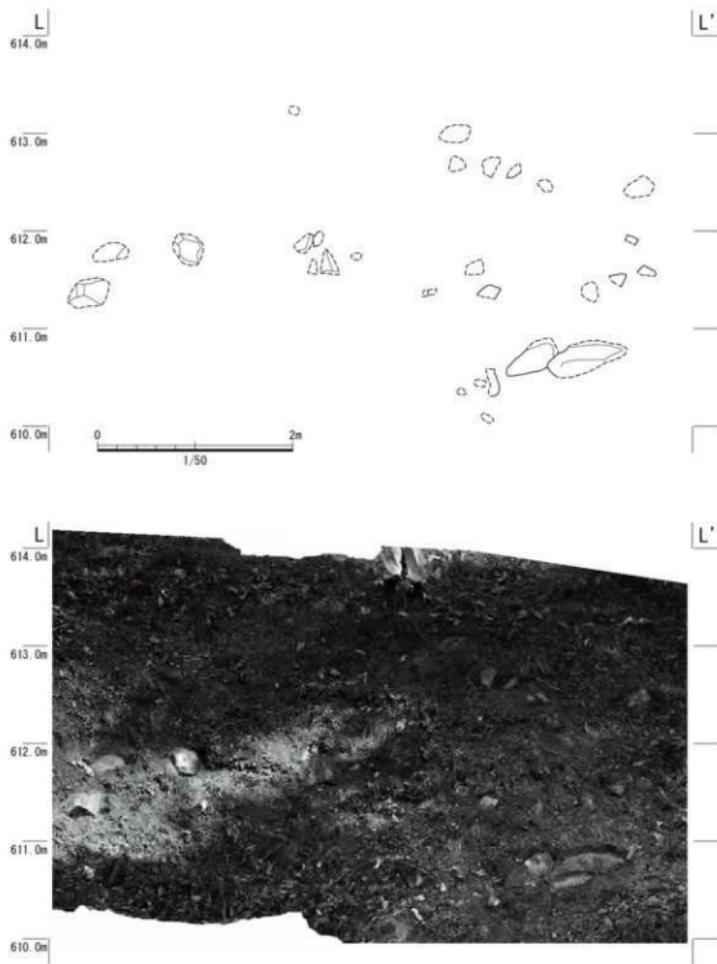
第59圖 小島城跡“J”石垣立面図



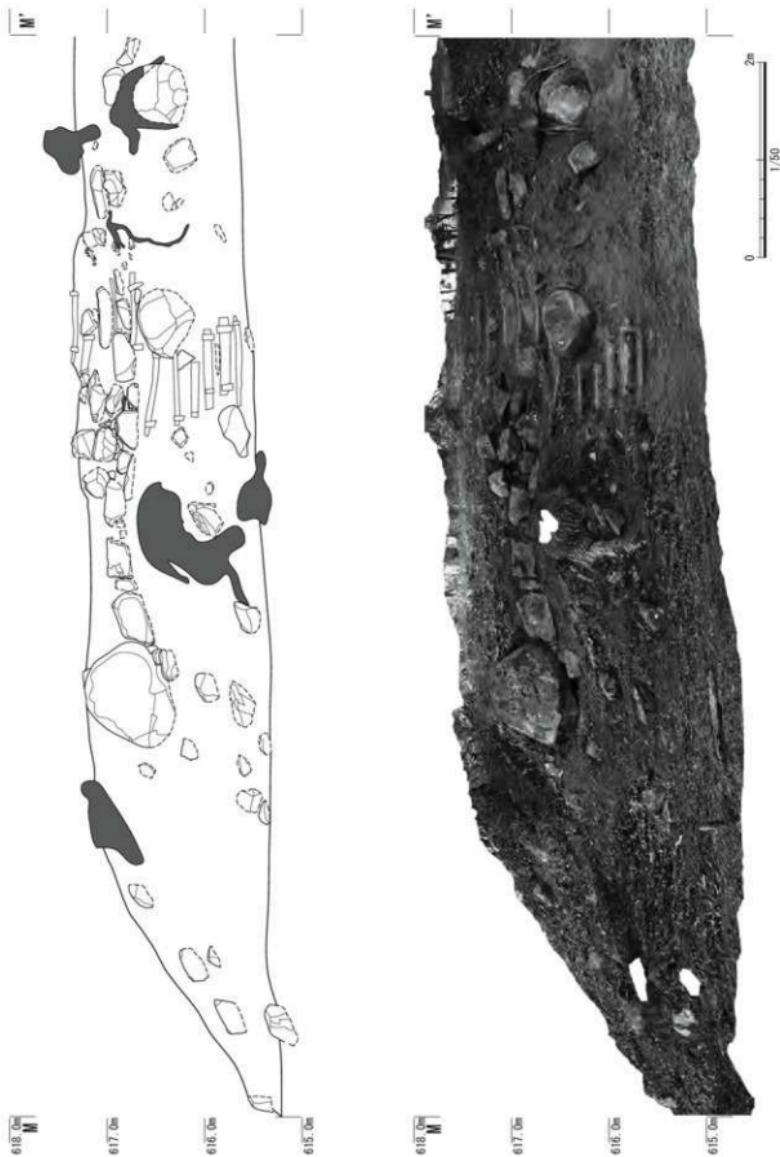
第60図 小島城跡 "J" 石垣オルソ図



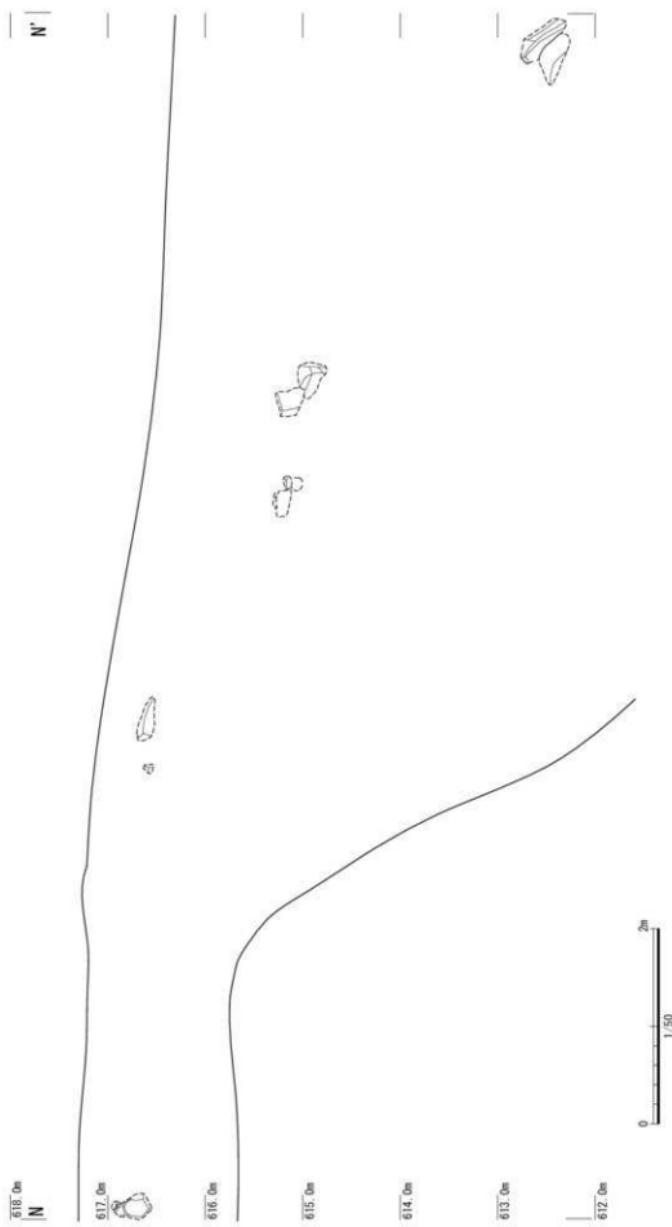
第61図 小島城跡 KK' 石垣立面図・オルソ図



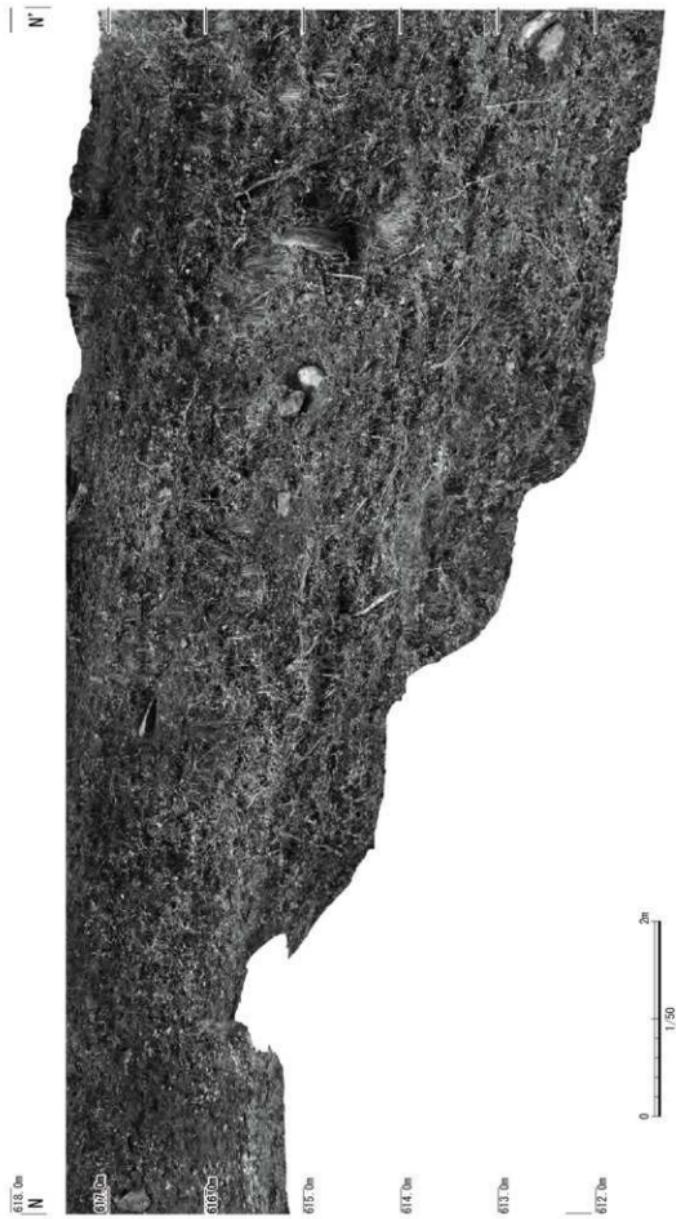
第62図 小島城跡 LL' 石垣立面図・オルソ図



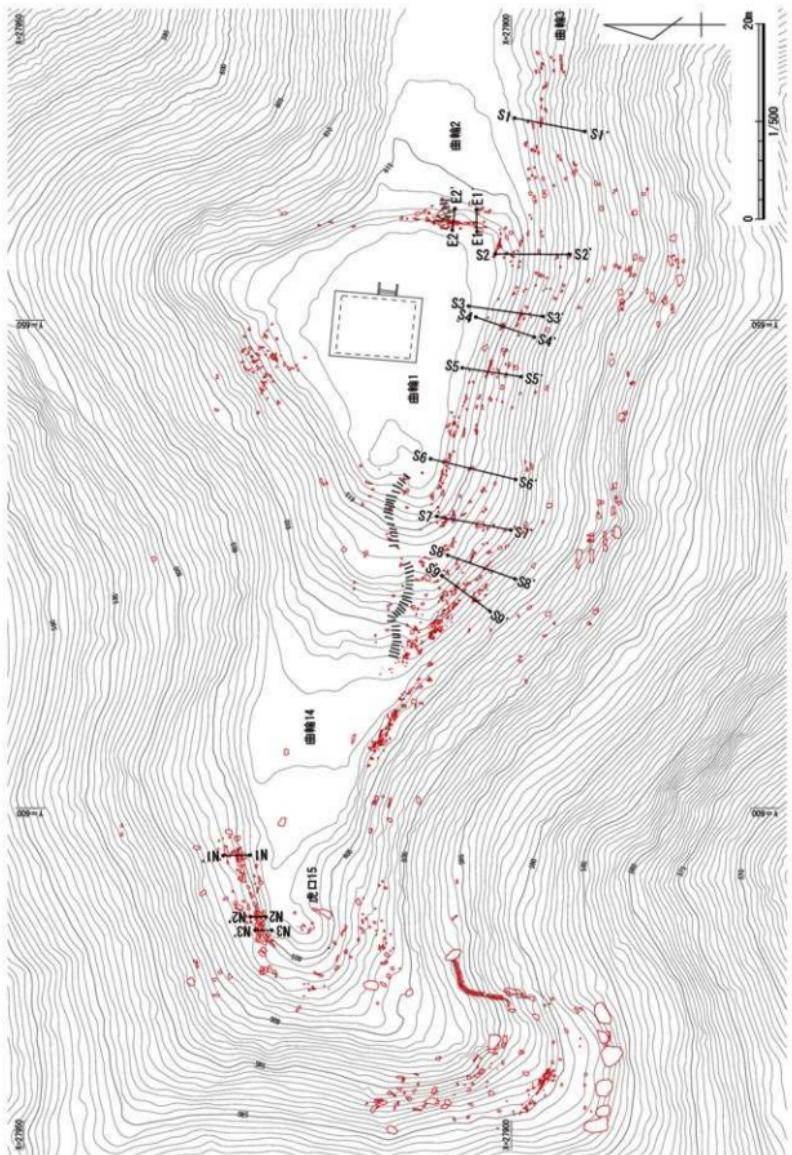
第63図 小島城跡 MW' 石垣立面図・オルソ図



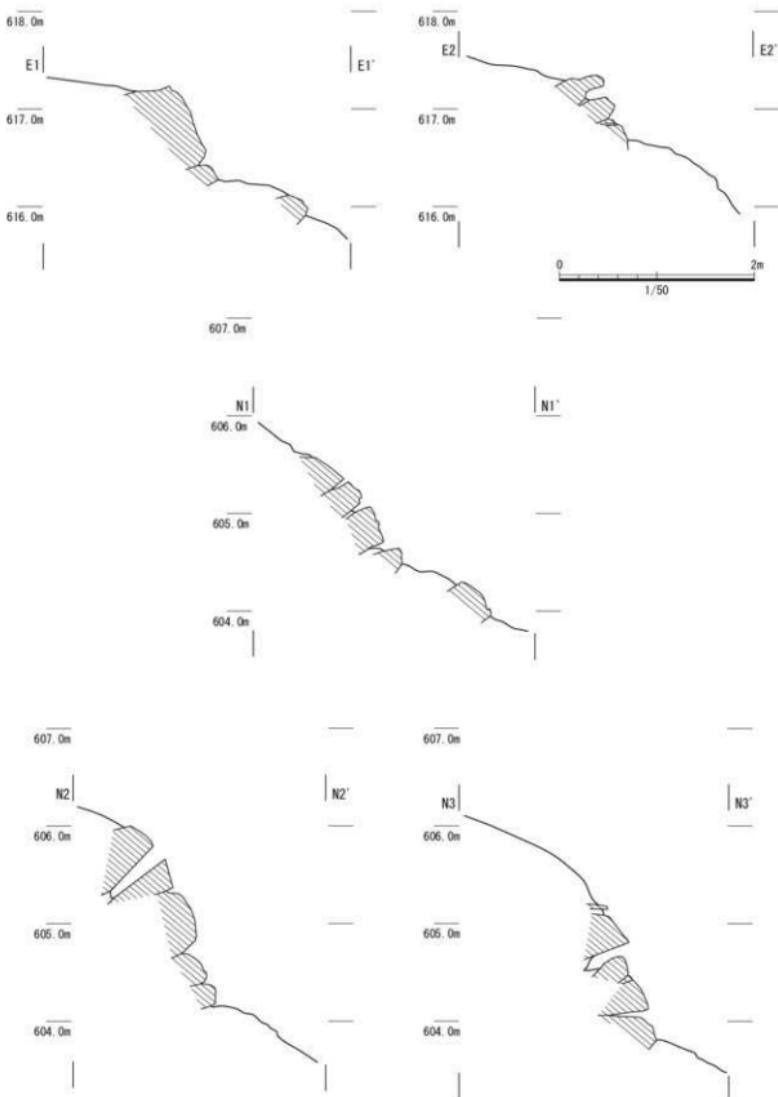
第64図 小島城跡 NN' 石垣立面図



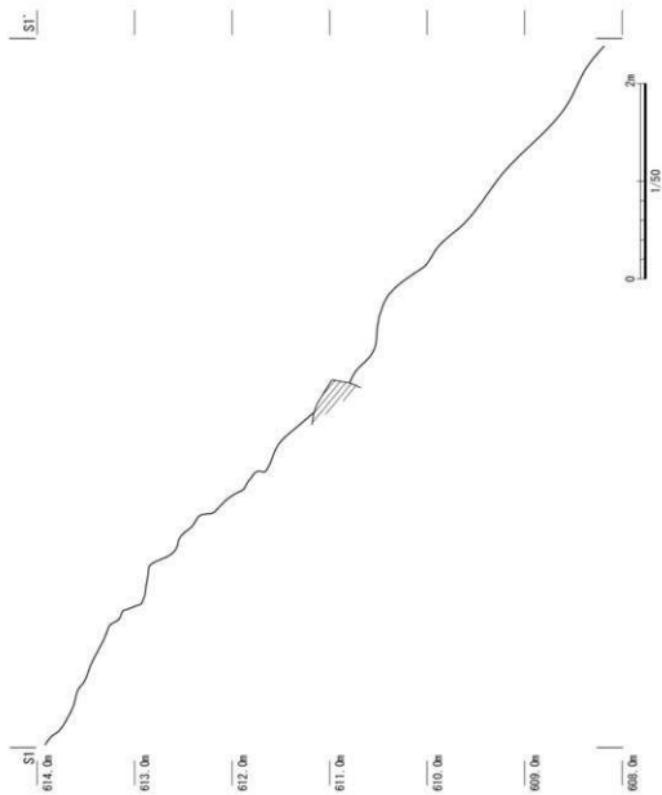
第65図 小島城跡 NW' 石垣オルソ図



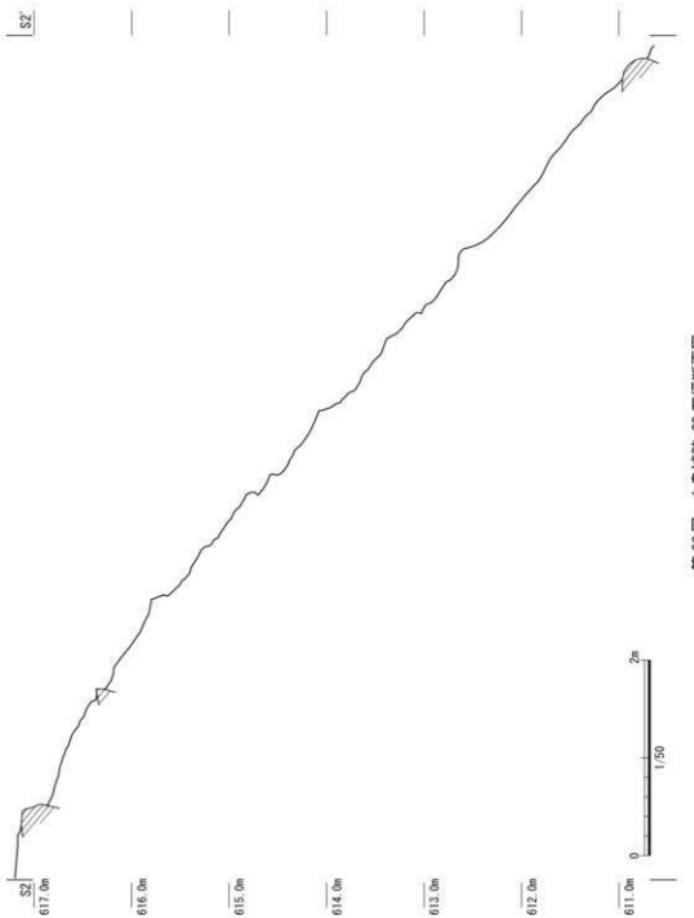
第66図 小島城跡 断面位置図



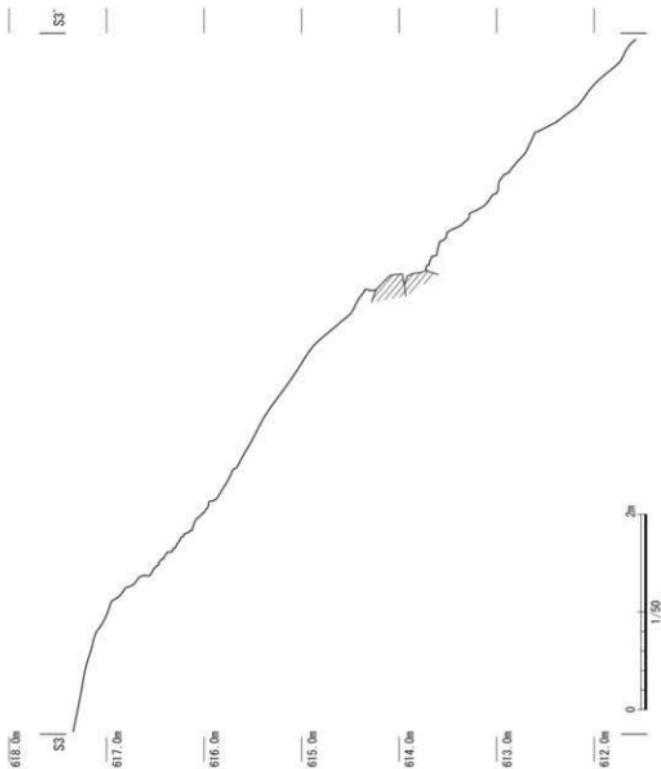
第67図 小島城跡 E1・E2・N1・N2・N3 石垣断面図



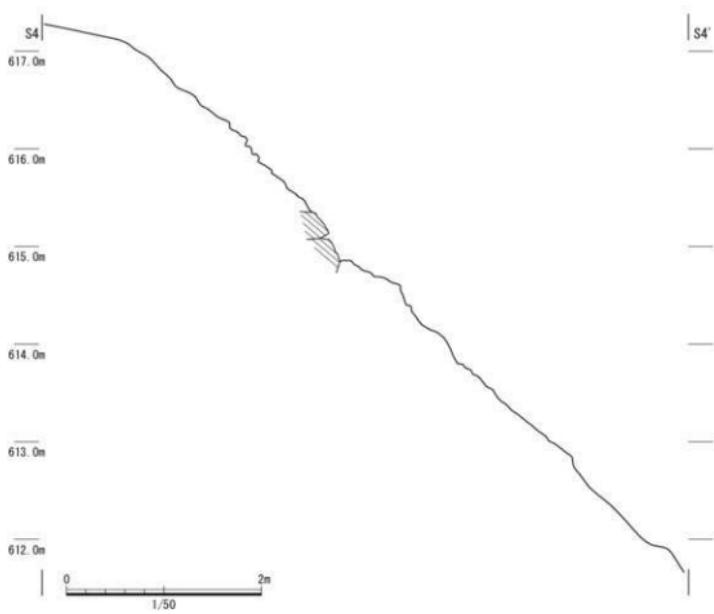
第68図 小島城跡 S1-S1' 石垣断面図



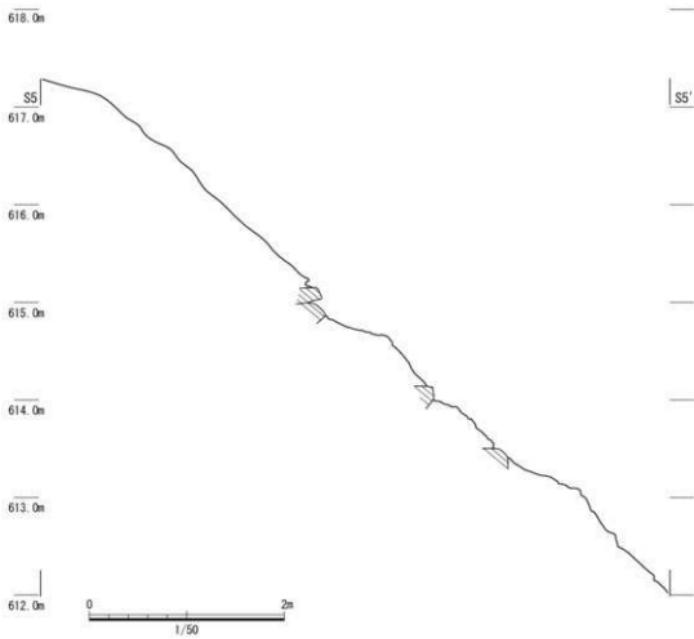
第69図 小島城跡 S2 石垣断面図



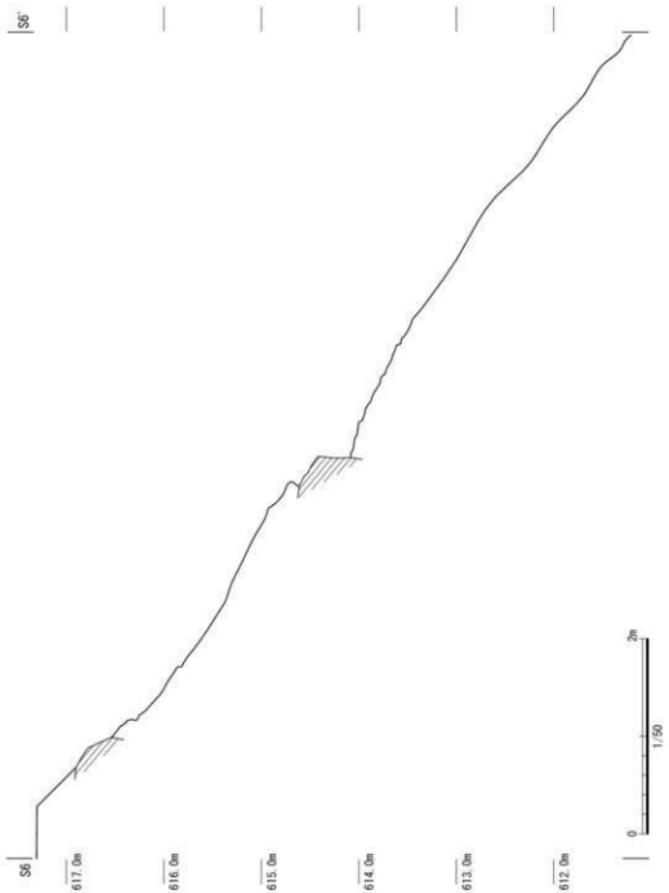
第70図 小島城跡 S3 石垣断面図



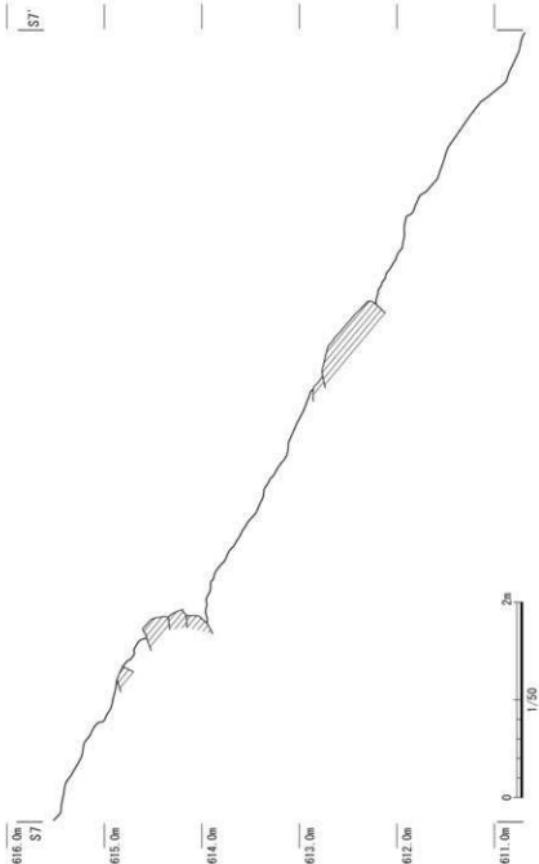
第71図 小島城跡 S4 石垣断面図



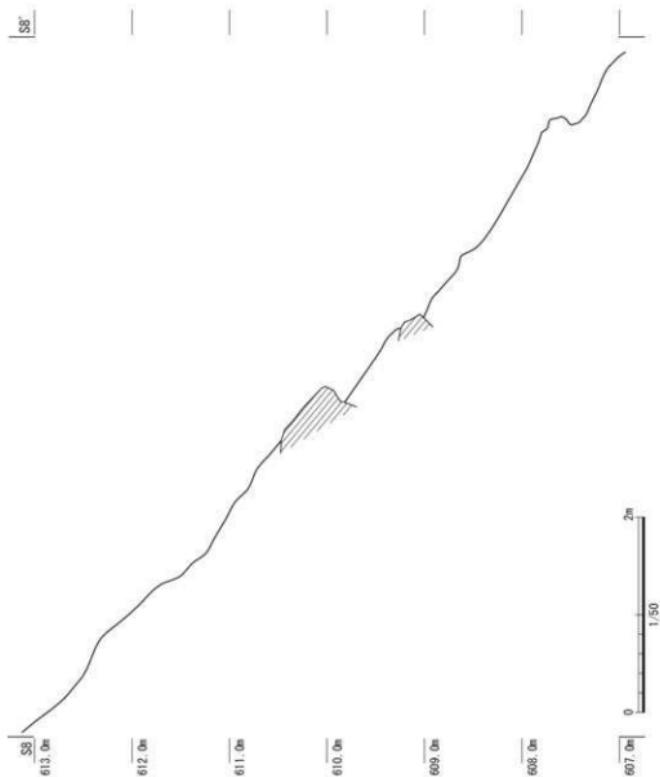
第72図 小島城跡 S5 石垣断面図

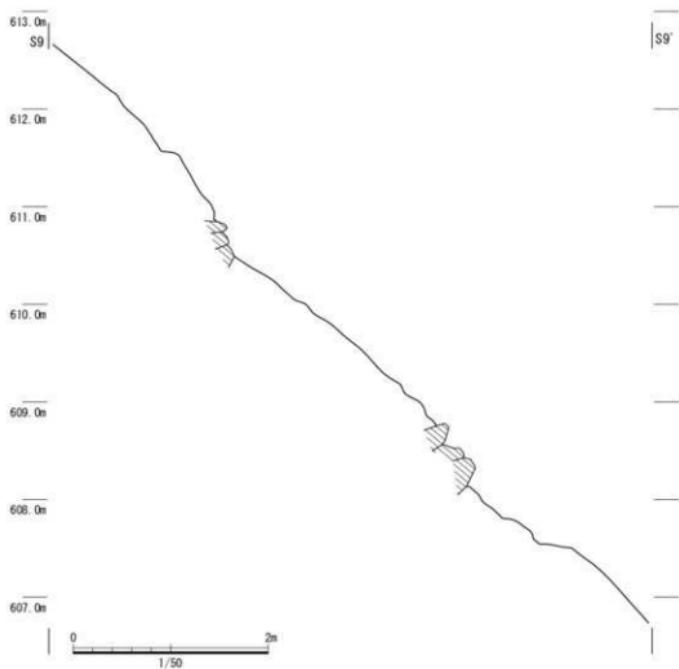


第73図 小島城跡 S6 石垣断面図



第74図 小島城跡 S7 石垣断面図





第76図 小島城跡 S9石垣断面図

## 第4節 野口城跡

野口城跡は、宮川右岸の丘陵山頂に位置する。曲輪1を中心とした城郭遺構、その北側の尾根のピークを中心とした城郭遺構、さらに東側に折れた尾根のピークを中心とした城郭遺構と、大きく3つのまとまりがある。それらに囲まれた南側の谷には、各地区をつなぐように細長い曲輪が配置される。それぞれ、主郭地区、北尾根地区、東尾根地区、南谷地区と区分して報告する（第77～79図）。

### （1）主郭地区

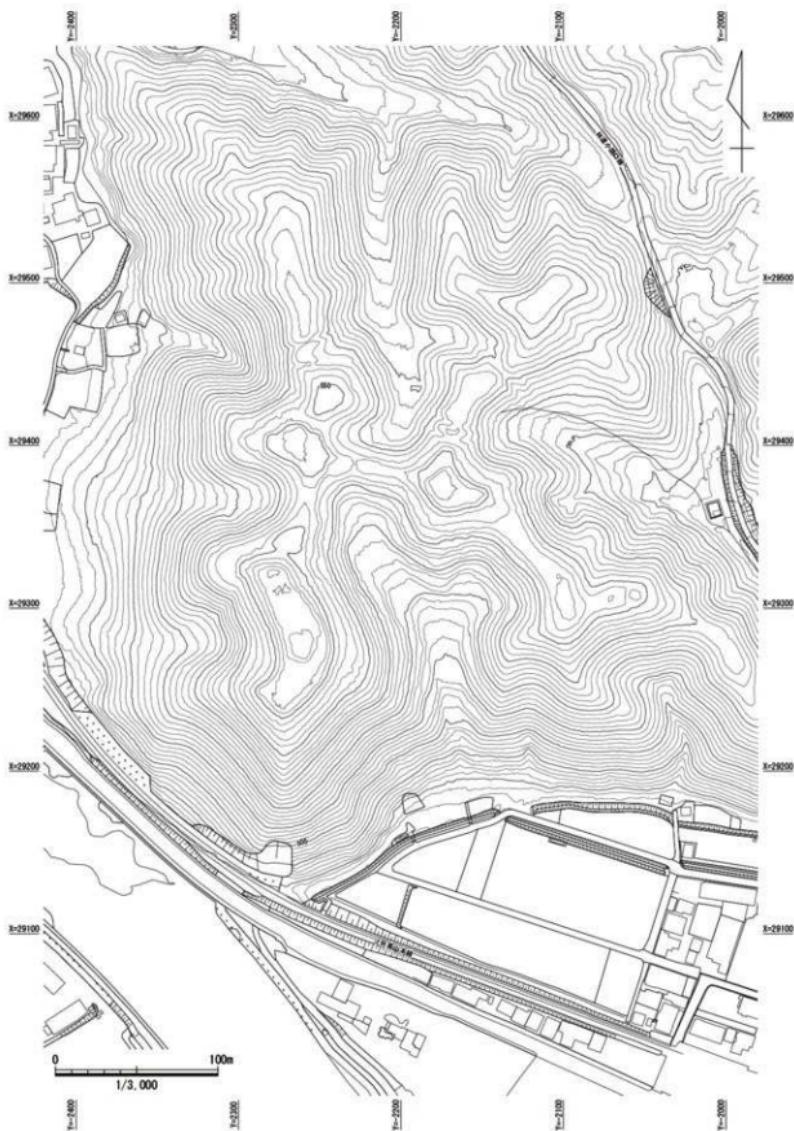
最も面積が広いのは、逆くの字状に屈曲する曲輪1である。その中央には方形の高まりである最高所の曲輪2が位置し、南北に二分される。北辺上端にのみ土壘を配置する。南側は北側の曲輪より低い。曲輪1の南側には、南側と西側に尾根が取り付く。南尾根には2つ、西尾根には一つの帯曲輪があり、その間には堅堀がある。曲輪1の東側切岸直下には山麓からの尾根が取り付く。切岸と尾根の接点には3本の堅堀と2本の土壘で構成される歓状堅堀群3が位置し、その両側にはやや広い土壘状の高まりを有する。曲輪1の北側には北側と西側に尾根が取り付く。曲輪北東隅は土壘が開口しており、虎口となっている。曲輪1の切岸を鋭角に曲がって下る。曲輪1の北側を巡る帯曲輪4と接するところに堅堀と土壘を設け、通路を設定している。帯曲輪4は西尾根につながるところで一段下がり、広くなる。北尾根地区には曲輪1から曲輪5につながる曲輪6が設定されるが平坦面の削平が甘い。またその東側には曲輪5の下方を通る通路状の帯曲輪7が接続する。

### （2）北尾根地区

中心となる曲輪5は不整形を呈する。北・東・西の3方向に尾根が伸びる。西側尾根には堀切8、土壘、曲輪9が設けられる。堀切8の北側は堅堀状に落ち、曲輪9との間に土壘・堀切が配置される。北側尾根は曲輪5の直下に堀切13を設け、さらにその30m先に土壘を伴う2本の大規模な堀切10で遮断する。北側尾根と西側尾根の間の谷には、3本の堅堀と4本の土壘で構成される歓状堅堀群11が配置される。その西側には2本の短い土壘と堅堀が配置され、東側には1本の堅堀が配置される。北側尾根の東側は横堀12が取り付き、南端は堅堀で落とす。東側の尾根は東尾根地区の中心となる曲輪15とつながる通路状の曲輪16である。なお、歓状堅堀群11の東端の堅堀は堀切13と接続し、堀底から虎口14を経由して曲輪16がある東尾根に取り付く通路設定がなされている。

### （3）東尾根地区

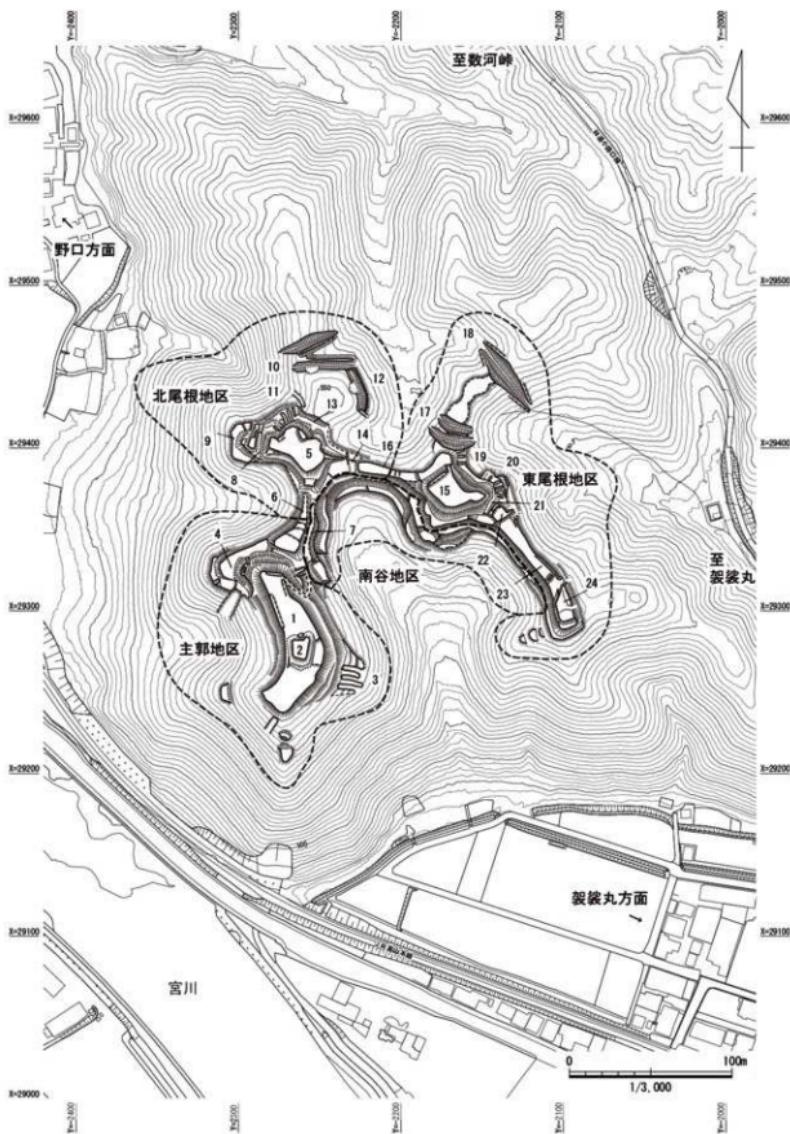
曲輪15は不整形を呈し、北西辺に土壘の可能性がある高まりが認められる。北側に開口する虎口が存在しており、曲輪16の東端へと下る。曲輪15には北側と南東側の尾根が取り付く。曲輪16の東端は、この北側尾根とつながる。この尾根は二重堀切17と不明瞭な平坦地、さらに土壘を伴う長大な堀切18で遮断される。この尾根が神岡方面の数河跡からつながる道へと接続する。二重堀切17の東側には3本の土壘と2本の堅堀で構成される歓状堅堀群19を配置させる。南東側の尾根までは帯曲輪が巡る。さらに南東側尾根と接するところに、上下端に横堀を伴う歓状堅堀群20を配置させる。歓状堅堀群20は5本の土壘と5本の堅堀で構成され、その南端の堅堀は、曲輪15直下で南東側尾根を遮断する堀切21とつながる。堀切21の南東尾根側には土壘が伴う。そこには方形の曲輪22と細



第77図 野口城跡詳細地形測量図



第78図 野口城跡微地形表現図



第79図 野口城跡遺構配置図

長い長方形の曲輪23が接続する。曲輪23は、東辺の北端と南端、南辺に土壘を有する。この南辺土壘を越えた南側で東辺の土壘が開口する。尾根の先端に台形の曲輪24がある。曲輪24の南側には2段の帯曲輪がある。曲輪24から東西に尾根が分かれる。東側尾根には城郭遺構が確認できず、西側尾根には曲輪24の2段目の帯曲輪と3つ的小曲輪が認められる。

#### (4) 南谷地区

主郭地区・北尾根地区・東尾根地区に囲まれる南側の谷には、各地区をつなぐように細長い平坦地群が連続する。谷の下方まで認められるが、主要曲輪から連続するところまでを曲輪と判断した。それぞれの曲輪は行き止まりとなっている。

#### (5) 特記事項

北尾根地区の北側尾根に2本の堀切10、東尾根地区の北側尾根に野口城跡で最も大規模な堀切18と二重堀切17を配置する。その間の谷に対しては、主郭地区に近い北尾根地区に当城唯一の横堀12を配置する。北側に向かって最大限警戒していると分かる。

それぞれの尾根を左右に迂回したところには、北尾根地区に敵状堅堀群11、東尾根地区に敵状堅堀群19と20を配置する。また、それぞれの地区をつなぐ通路状の曲輪16も北側には明瞭な切岸を設ける。

以上のように、北側を敵正面とし、主郭である曲輪1を守るために北尾根地区と東尾根地区に城郭遺構を配置したものと考えられる。

### 第5節 小鷹利城跡

小鷹利城跡は、古川盆地から山間地へ移る山頂に立地する。山頂周辺には、最も広い主郭と考えられる曲輪1、虎口、土壘などの城郭遺構がまとまっており、そこから派生する尾根と切岸や堀切で分断されている。このため、狭義の城域と捉えることができる。また、各尾根には曲輪や堀切などの城郭遺構が認められるため、外側の防御ラインと捉えることができる。それぞれ、主郭地区、北尾根地区、北東尾根地区、東尾根地区、南尾根地区、西尾根地区と区分して詳述する（第80～82図）。

#### (1) 主郭地区

山頂の最高所には方形の曲輪1が認められる。主郭と考えられる。北・南・西の3方向は1～2mの切岸と下段の曲輪2で囲まれ、東側は切岸で大きな段差が生じる。曲輪1と2は、西側の開口部分で通じる。また、曲輪1の南東隅は土壘3が張り出しており、曲輪2へ下ることができる。この曲輪1・2が最も広い曲輪である。曲輪1と2には、径50cmほどの河原円礫が地表面に露出している。元々礎石であった可能性がある。曲輪2の南側は高低差5mほどの切岸となっている。下段の曲輪4へは、土壘3南端の開口部からつづら折れで下ることができる。曲輪4は2mほどの高さを持つ土壘で囲まれる。東辺は土壘が開口している。東尾根地区へ至る虎口5である。虎口5は東側に開口しており、土壘に沿ってその直下を南下し、堅堀6手前で東側に屈曲して尾根道に取り付く。この堅堀6で、尾根道より南側を遮断する。曲輪4の南側切岸には、南尾根地区に接するところに2本の堅堀があり、

長大な堀切7と堅堀により遮断する。堀切7にも南尾根地区と接するところに土壘を設ける。曲輪4の西側には土壘を挟んで半円形の曲輪8が接する。曲輪8も土壘で囲まれるが、南辺が開口する。曲輪8は曲輪2の西側切岸ラインより西側に張り出す。その直下の西尾根側に切岸と長大な堀切を配置する。堀切の北側は斜面に垂直方向に屈曲して落ちる。それと平行する形で西尾根に向けて3条の堅堀が連続する。

曲輪2の北側に行くと、西尾根側に土壘を持つ方形の曲輪9、台形の曲輪10・11と続き、堀切12で大きく遮断する。

曲輪9の西側斜面は、曲輪2の西側斜面と同一である。ここに10本の堅堀で構成される歓状堅堀群13を扇形に配置する。この歓状堅堀群13のうち、北側の堅堀4本は横堀から派生する。その横堀が北側斜面に垂直方向に落ち、北から2本目の堅堀となる。南側の5条の堅堀は上端が閉じ、細長い曲輪で繋がる。歓状堅堀群の10m南側に1本の堅堀14を配置させる。このような構造から11条の歓状堅堀群を配置させたと見ることもできる。歓状堅堀群13を配置した斜面を下りきった谷に、さらに堀切15を設ける。堀切の西側の南半分に土壘が伴う。

#### (2) 北尾根地区

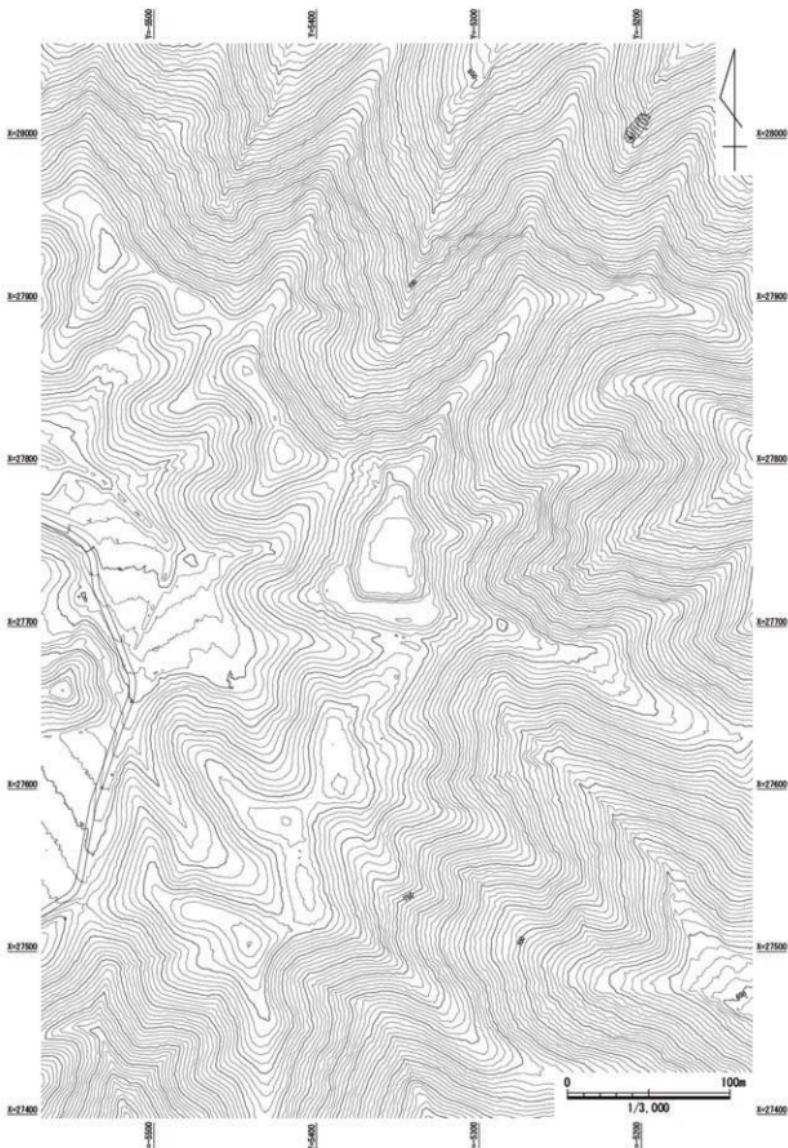
北尾根地区は、長方形の曲輪と高低差がある切岸及び堀切が続く。主郭地区の堀切12から20mで切岸と両堅堀があり、長方形の曲輪16が配置される。曲輪16の北辺に土壘のような高まりが認められる。さらに尾根筋を平坦にした3つの長方形の曲輪が接続する。最下段の曲輪は上端が不明瞭である。そこから北と東に尾根が派生する。北側には城郭遺構はない。東側の尾根に40mのところで南側斜面に切岸を施し、その10m先で小曲輪17がある。20m進んだところで北側に切岸と堅堀を伴う不明瞭な曲輪18がある。さらに50m先に大規模な堀切19があり、南側は堅堀で落とす。この堀切19で城域を区切る。

#### (3) 北東尾根地区

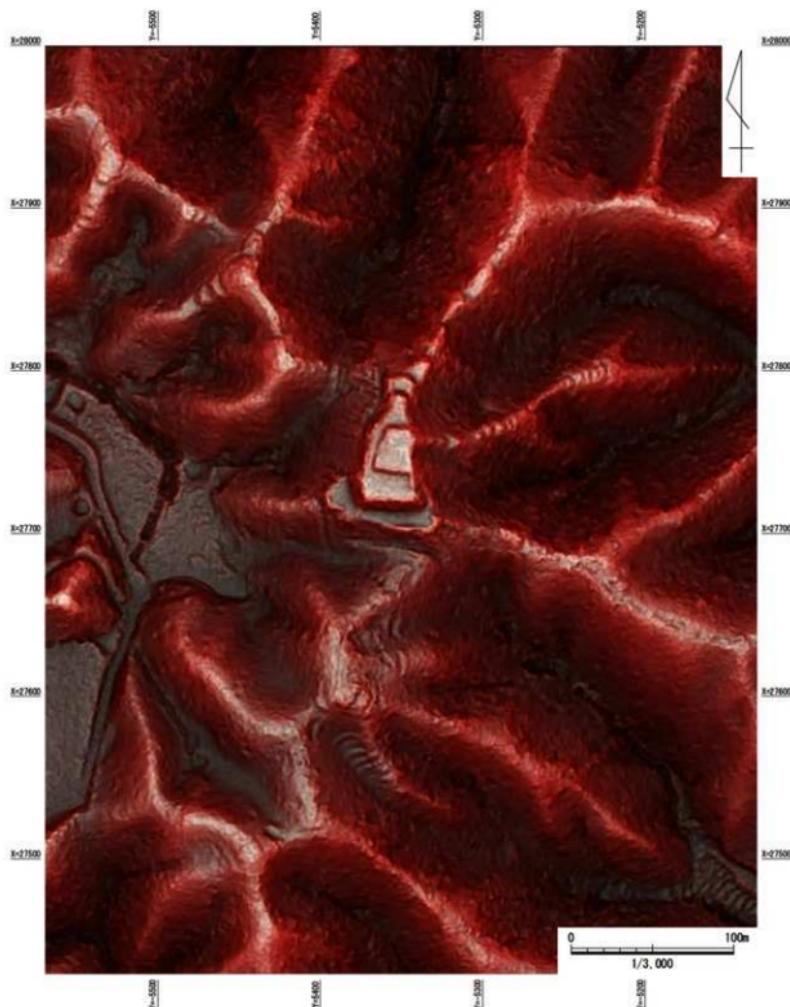
北東尾根には曲輪1の東側切岸に不明瞭な平坦地があり、その10m先に切岸がある。また、10m先の曲輪20が三角形状を呈し、北東地区で最も広い曲輪である。その南側には堅堀がある。さらに10m先からは6つの小曲輪群21が連続する。V字状の堀切22を挟み、7つの小曲輪23が続き、ここで城域を区切る。この北東尾根の中間に位置する小曲輪群21の最下段の曲輪から北側の谷に向かって細長い曲輪24が接続する。曲輪24の西辺は尾根側半分に土壘が伴い、谷川半分は開口する。この開口部から下がった位置には湧水地点25がある。曲輪24と湧水地点25が接することから、湧水地点25は小鷹利城跡の機能時から水場として利用されていた可能性を想定できる。

#### (4) 東尾根地区

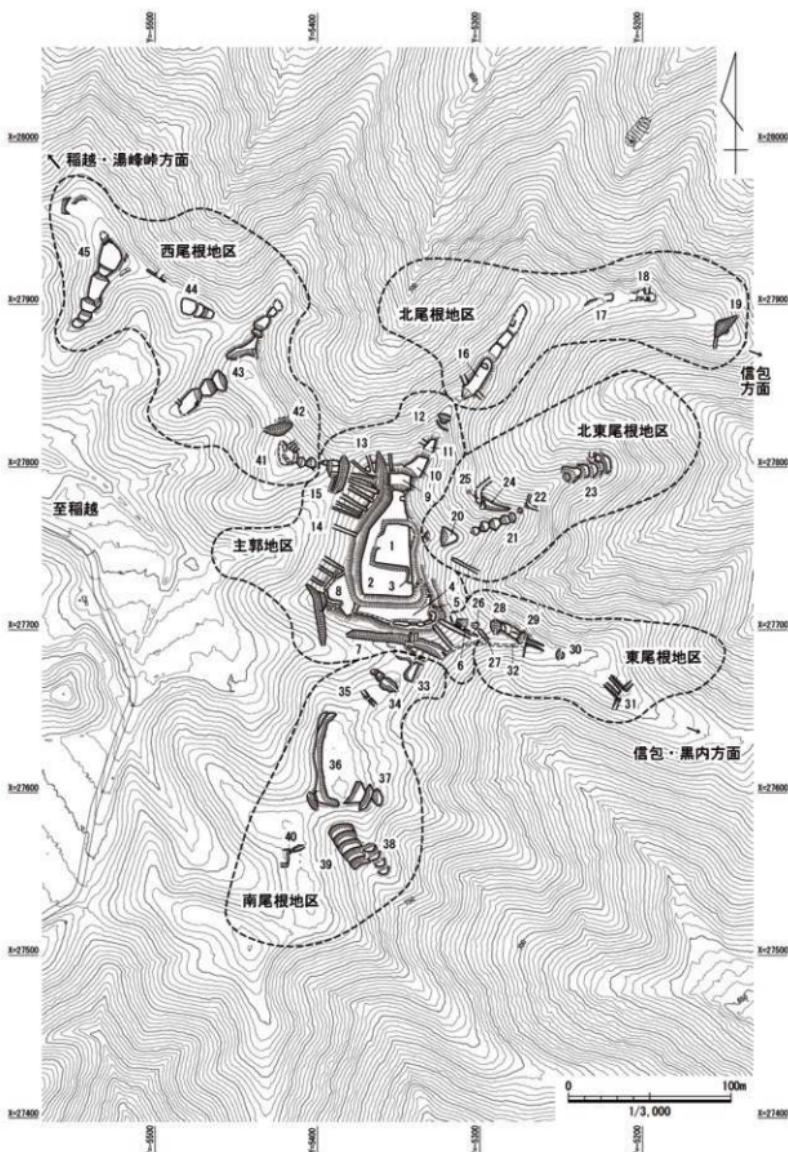
東尾根には、虎口5から山麓まで道が続く尾根道に城郭遺構を確認できる。尾根道に入り、10mのところで切岸があり、南側に堅堀27を伴う小曲輪26が配置される。その10m先に東側に土壘を伴う堀切28がある。V字形に掘り込まれた尾根道が15mほど続き、堀切29が配置される。堀切29より東側15mほどは、V字形に掘り込まれた尾根道が続く。その窪みにより、堀切29の東側上端は滅失している。さらに20m離れて堀切30、50m離れて両堅堀31と続き、城域を区切る。両堅堀31



第80図 小鷹利城跡詳細地形測量図



第81図 小鷹利城跡微地形表現図



第82図 小鹿利城跡遺構配置図

から西側 10 mほども、尾根道の中央がくぼむ。これらは近年までの使用による通路状の掘り込みの可能性がある。この掘り込みが後世の削平とすると、両堅堀 31 はかつて堀切であった可能性を指摘することもできる。

東尾根地区の中央辺りに位置する堀切 29 からは、堅堀 27 と 2 本の堅堀 6 の下方を通って南尾根の堀切 7 に至る通路 32 がある。

#### (5) 南尾根地区

南尾根には、堀切 7 から登り勾配で続く尾根に小曲輪や堀切、両堅堀と連続させた城郭遺構がある。堀切 7 を登ると南側が切岸となる不明瞭な平坦地がある。尾根道の東側に堅堀を伴う曲輪 33 が続く。10 m離れて堀底が広い堀切 34 がある。堀切 34 の西側は 2 つの小さい平坦地が続く。10 m離れて両堅堀 35 があり、20 mで次の広い尾根のピーク 36 に至る。ピーク 36 は西辺 50 mにわたり切岸と帶曲輪を配置させる。

ピーク 36 の東側に続く尾根には 3 つの小曲輪 37 を配置する。また、その南側の尾根には 4 つの小曲輪群 38 を、さらにその南側に接する谷筋には 5 つの曲輪群 39 を配置する。この曲輪群 39 最下段の 5 段目と小曲輪群 38 の 2 段目の曲輪、曲輪群 39 の 4 段目の曲輪と小曲輪群 38 の最上段の曲輪がつながる。広い尾根のピーク 36 の西側には切岸と帶曲輪を設け、続く尾根には土壘と堀切も配置する。さらに 30 m南側に両堅堀 40 を配置し、城域を区切る。

#### (6) 西尾根地区

西尾根には、堀切 15 から湯峰峠まで続く尾根道に城郭遺構を点在させる。堀切 15 を登ると、3 つの小曲輪を経てピーク 41 に至る。堀切 15 に接する小曲輪の南半分は土壘状の高まりとなっており、北半分が通路として設定される。ピーク 41 には北側に 2 本の堅堀を配置させる。その北側は堀切 42 により遮断する。堀切 42 から 50 m先で次のピーク 43 に達する。

曲輪は確認できないものの、南北に派生する尾根を造成する。北側尾根は 5 つの小曲輪を経て次のピークに達し、城域を区切る。南側の尾根は 3 つの曲輪を連続させる。最下段の曲輪へは土壘を伝つて降りることでき、また南西隅に堅堀を配置させる。ピーク 43 から 50 mほどで 3 つの連続する曲輪 44 に至る。さらに 50 m離れて曲輪 45 が所在する。曲輪 44 と 45 の間の尾根道には、北側のみ土壘を作り、曲輪 45 からは南と西に尾根が分かれる。南尾根には 7 つの曲輪を連続させる。曲輪 45 には西尾根が接続する。その 20 m先に切岸を設け、城域を区切る。

#### (7) 特記事項

主郭に通じる各尾根に城郭遺構を配置する構造である。特に西尾根側を警戒する。曲輪 1・2 へ通じる曲輪 9 は西辺に土壘を作り、曲輪 2 から 9 の西側切岸に畝状堅堀群 13 を配置し、その谷部の西側尾根に続くところに堀切 15 を配置する。また、畝状堅堀群 13 の方向に対しては、曲輪 8 を張り出させて監視する。曲輪 8 は、取り囲む土壘、直下の三本の堅堀と堀切で防御している。さらに、南側も長大な堀切 7 と切岸を施し、曲輪 8・4・2 と順に登る構造となっている。このように、西側と南側は同一の考え方で構築された様子がみてとれる。

対して、北尾根側は堀切 19 や堀切 12、堀切 30 や堀切 28 など、所々で遮断するのみである。また、

東側尾根は最終的に直角に折れて虎口5に接続する。さらに北東尾根には湧水地点が認められる。

以上より、小鷹利城跡は西側を敵正面とし、南側も警戒し、北側と東側は自身の領域と認識していたものと考えられる。

## 第6節 向小島城跡

飛騨市古川町笹ヶ洞から信包にかけて所在する。宮川の支流殿川右岸の丘陵山頂に位置する。姉小路氏の一角・向氏の居城とされる。曲輪1を中心とした城郭遺構と、曲輪19を中心とした城郭遺構の2つのまとまりがある。それぞれ、主郭地区、西尾根地区と区分して報告する（第83～85図）。

### （1）主郭地区

最高所には方形の曲輪1が認められる。主郭と考えられる。曲輪1は南辺の上端が直線を意識する。西側が土壘状に一部張り出し、その北側が緩やかな斜面となって曲輪2へ至る。曲輪2は五角形状であり、北側先端部分で曲輪3と接続する。この曲輪1～3の北・南・西側を巡るのが帶曲輪4である。対して、曲輪1から西側は尾根に沿って曲輪5に通じる。その下段の曲輪6は帶曲輪4と同一レベルである。帶曲輪4と曲輪6は直接つながらないものの、2つで曲輪1・2・3・5を巡る帶曲輪と捉えることもできる。

これら中心となる曲輪1～6へは、北・北東・南東・南・西の5方向から尾根が取り付く。北側尾根には帶曲輪4から20mあたりまで自然地形であり、そこから8つの小曲輪が連続する。その先は急峻な自然地形である。

北東側尾根には、曲輪6からつづら折りで曲輪7までくだる。この曲輪7には、帶曲輪4の南東端から曲輪5・6の東裾を通って至る通路も設定されている。さらにその下段には小曲輪8・9と続く。それらに帶曲輪10が巡る。小曲輪9の北東側が一段下がっており、帶曲輪10の南側から東辺上端に伴う土壘に接続する。帶曲輪10の西側は緩斜面となっており、南西側で上段の曲輪7からの切岸と土壘が接続して行き止まりとなっている。帶曲輪10からは北側と北東側に尾根が派生する。北側尾根は長大な堀切11で遮断し、両側を堅堀で落とし、城域を区切る。北東尾根に小曲輪が1つあり、その両脇に堅堀12・13を配置させる。尾根を遮断する城郭遺構は確認できず、麓への尾根道として使用された可能性がある。

南東側尾根には、帶曲輪4から土壘を伴う長大な堀切14を配置し、さらに20m下方に堀切15を配置して遮断する。

南側尾根には、切岸と曲輪16を配置し、そこから5つの小曲輪群を連続させる。それぞれの小曲輪群には東側に通路が設定されている。最下段を堀切17にて遮断する。堀切17の北東側には堅堀を配置する。小曲輪群をつなぐ通路がある尾根の東側斜面を遮断したものと考えられる。

これらに対し、西側尾根は通路状の曲輪18となっており、西側尾根の中心となる曲輪1と同規模の曲輪19に至る。

### （2）西尾根地区

曲輪19は東端がややくぼみ、1つの小曲輪を経て通路状の曲輪18に至る。曲輪19には北・南・

西の3つの尾根が取り付く。曲輪19の西辺には土壘の可能性がある高まりを観察できる。

北側尾根には3つの小曲輪と、東辺の土壘にて規定された通路を経て曲輪20に至る。通路状の曲輪18も曲輪19の東裾を通り、北側尾根に至っている。曲輪20の北側は、長大な切岸で落とされる。西側に堅堀を配置する。そこから20m離れて7つの小曲輪群21がかたまり、その西側に堅堀を配置する。それより先は急峻な自然地形である。

西側尾根は5つの小曲輪を経て長方形の曲輪22に至る。曲輪22の東側には方形の高まりがあり、北及び西辺上端には土壘が伴う。南側からは西側土壘の南を通る通路が設定され、切岸をくだって畝状堅堀群23上端の横堀24に至る。畝状堅堀群23は、5つの堅堀と4つの土壘で構成される。その北側は、横堀24と同じレベルから掘り込まれる堅堀25で遮断する。さらに横堀24と堅堀25の間に、少し下がったところに堅堀を配置する。この2本の堅堀の間を尾根が通っており、通路であった可能性が想定される。対して、畝状堅堀群23の南側は、横堀24の南端が方形の小曲輪状となり、その下段にも小曲輪を連続させ、そこから堅堀を落とす。畝状堅堀群23と堅堀の間の尾根には小曲輪26を配置する。曲輪22からの通路は小曲輪26まで接続していた可能性が想定される。

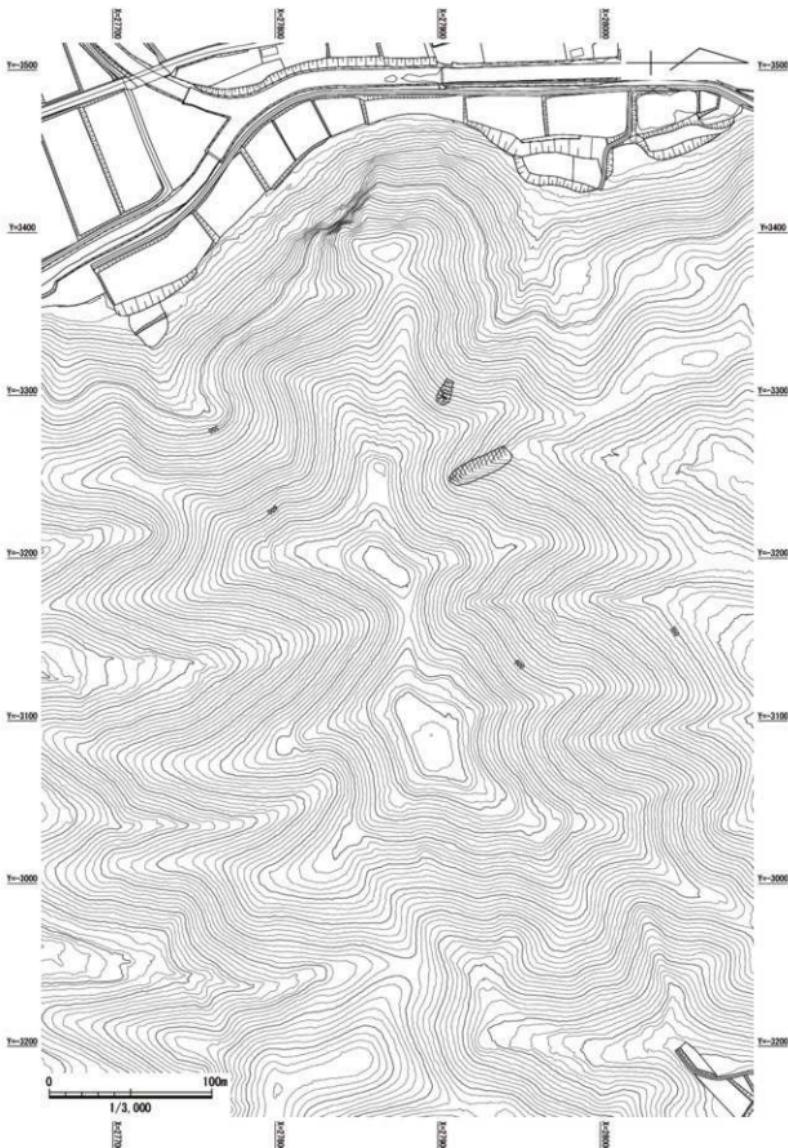
南側尾根は、2つの小曲輪を経て堀切27で遮断する。また、8つの小曲輪を経て、土壘を伴う堀切28に至る。それぞれの小曲輪をつなぐ通路が東側に直線的に設定される。通路は大きく3段の段差を有する。堀切28の南側は両堅堀が配置され、二重堀切の様相を呈する。

### (3) 特記事項

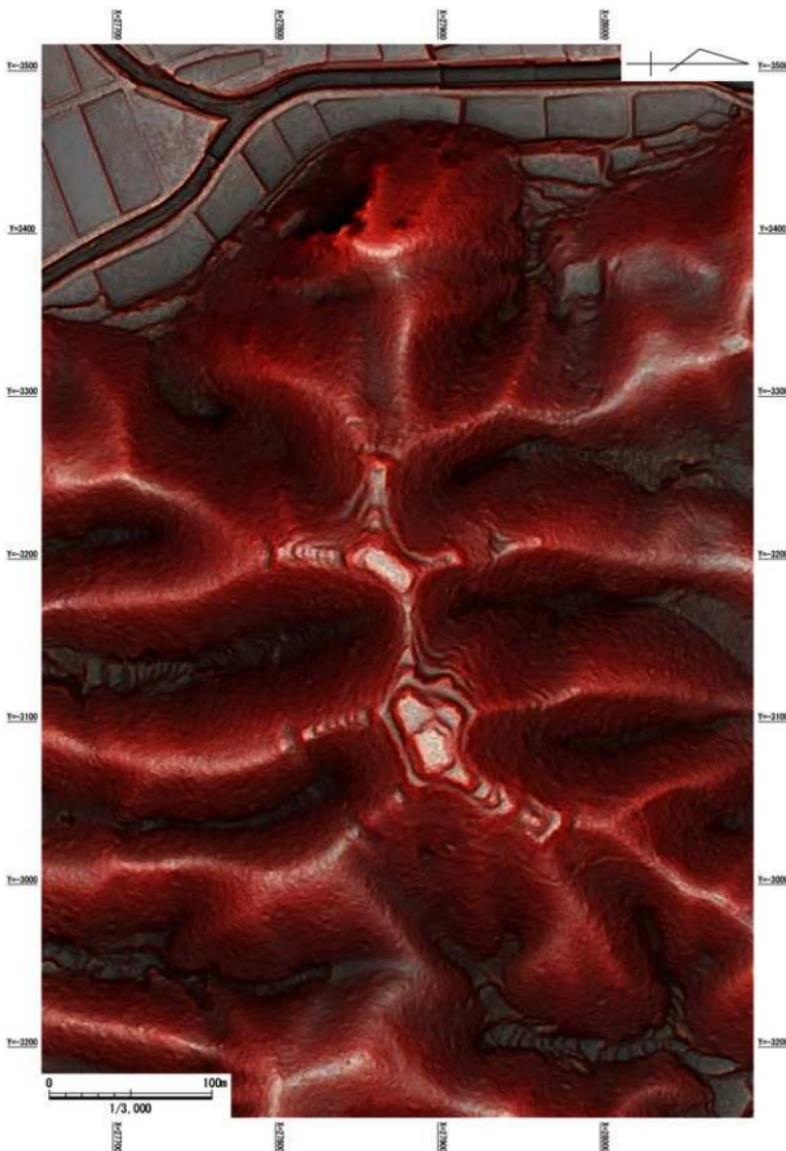
曲輪1と曲輪19を結ぶ尾根が城郭の中心をなしている。その両曲輪に対し、西側に横堀24を伴う畝状堅堀群23及び高低差が10mほどの切岸と曲輪22の西側土壘を配置する。向小島城跡で最も厳重に警戒する。また、南側の3つの尾根には、ほぼ同一レベルで最下段に大規模な堀切を施す。西から堀切28・17・15である。南側の尾根からの侵入も警戒している。最も西側の堀切28に両堅堀を伴うのは、西側を厳重に守っていたためと推測される。

対して、北側を見てみると。畝状堅堀群23を北に迂回すると、西尾根地区の北側尾根の西側に至るが、そこには曲輪22北辺の土壘、及び曲輪20と曲輪群21それぞれに伴う堅堀を配置している。それより東側には遮断を目的とした城郭遺構は配置されない。また、主郭地区には北東側尾根に堅堀12と13の間を通る尾根道、西尾根地区に畝状堅堀群23と堅堀25の間を通る尾根道が想定される。さらに、曲輪1については、南辺を直線的に仕上げているものの、北辺の切岸は明瞭でない。

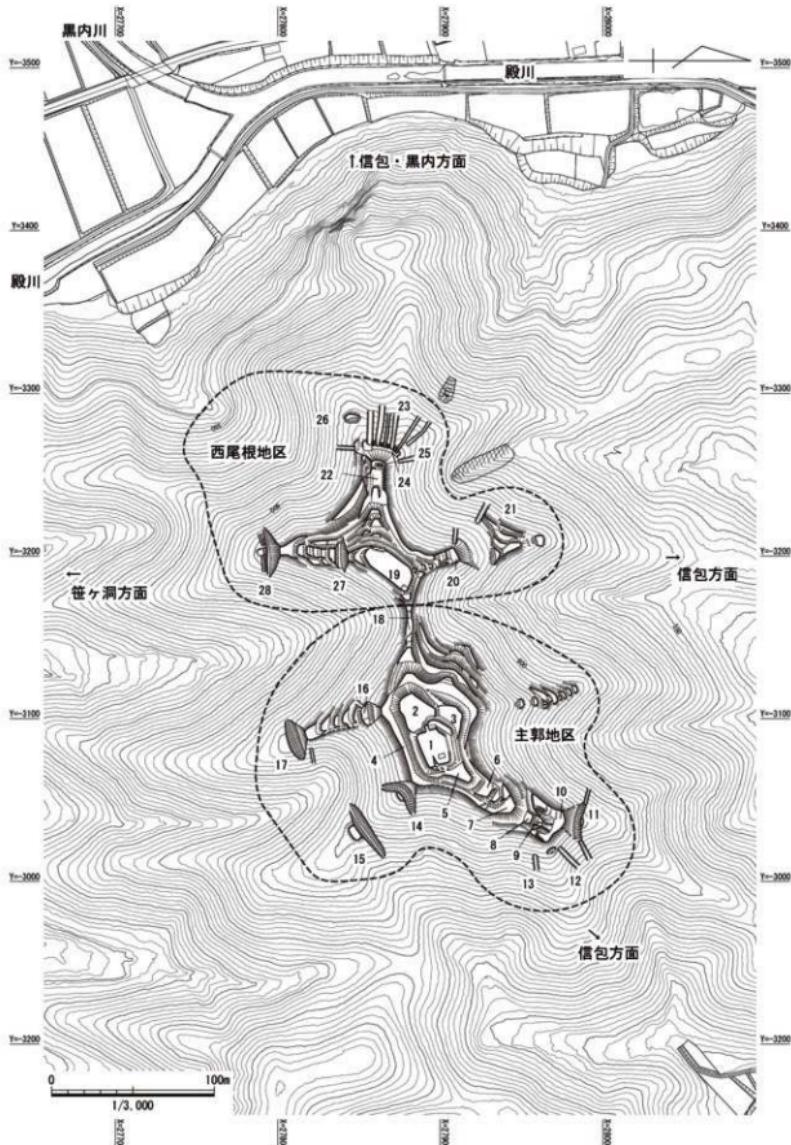
以上より、向小島城は、西・南側を敵正面とし、北・西側を自身の領域と考えて遺構を配置したものと考えられる。



第83図 向小島城跡詳細地形測量図



第84図 向小島城跡微地形表現図



第85図 向小島城跡造構配置図

## 第7節 小結

本章では、姉小路氏城館跡に関わる5城において、詳細測量図・微地形表現図を基とした城郭遺構の解釈を遺構配置図として示した。それぞれの山城で見出した遺構配置の共通点について、ここでは地表面観察の事実記載に留めて整理する。

**中心となる曲輪群の独立性が高い** 各山城では、主郭と考えられる曲輪一帯を一段高く配置するという傾向が認められる。古川城跡の曲輪1・2、小島城跡の曲輪1・4、野口城跡の曲輪1・2、小鷹利城跡の曲輪1・2、向小島城跡の曲輪1～3である。また、古川城跡の曲輪2、小島城跡の曲輪4、野口城跡の曲輪2のように、一段高い櫓台を配置する。

これらは中世段階の普遍的な様相であり、主郭や櫓台を構築する際に同じような考え方に基づいていた可能性がある。

**堀切と畝状堅堀群** 古川盆地の外郭に位置する山城では、盆地へとつながる街道から各山城に至る尾根を厳重に警戒する様相が看取される。小島城跡では神原峠方面に通じる東側尾根に堀切7を配置する。野口城跡では、数河峠方面に通じる2本の北側の尾根に二重堀切17・堀切18、二重堀切10・堀切12、さらに、それらの尾根を迂回したところに畝状堅堀群11・20をそれぞれ配置する。小鷹利城跡では、湯峰峠方面に通じる西側尾根に堀切15と畝状堅堀群13を配置する。向小島城跡では、小島峠方面の南側尾根3本に堀切15・堀切17・堀切28を配置する。

これらは、主郭を防御し、城域を明示したものである。また、広い範囲で考えると古川盆地への侵入を防ぐという考え方に基づいて各山城が機能していた状況を看取することができる。

**樹形虎口** 登城のための通路を直角に屈曲させる樹形虎口は、3城において認められる。古川城跡の虎口7、小島城跡の虎口8と虎口15、小鷹利城跡の虎口5である。このうち、小島城跡の虎口8と小鷹利城跡の虎口5は土壘と切岸にて通路を規定するのに対し、古川城跡の虎口7と小島城跡の虎口15には石垣を伴う。

**石垣** 古川城跡・小島城跡では、主郭と想定される曲輪や虎口周辺に石垣を配置する点が顕著である。古川城跡では、曲輪1・2、帶曲輪3、曲輪4周囲の切岸に、小島城跡では曲輪1、曲輪14周辺の切岸に石垣を設ける。古川城跡は主要部周辺に、小島城跡は主要部の北側以外の方向に設けている。古川城跡は判然としないが、小島城跡は古川盆地側に集中して配置した状況が想定できる。また、両城とも樹形状の虎口周辺に比較的大型の石材を用いているが、斜面の切岸については20～30cm程度の石材を用いる場合が多い。小島城跡の石垣から推測される石垣の角度や空隙の有無等、構造的特徴も一様ではない。このように石垣については、地区によって配置関係や構造が異なる様相が想定される。

## 【第4章 主要引用参考文献】

- 大下永 2021c『城館調査における赤色立体地図の活用について～飛騨市の調査事例から～』『飛騨市歴史文化調査室報』第3集、飛騨市教育委員会
- 古川町 1986b『古川町史 付図 史料編四』
- 岐阜県教育委員会 2005『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第4集（飛騨地区・補遺）』
- 佐伯哲也 2018『飛騨中世城郭図面集』桂書房